古事記傳

十七

太政官文庫
和書門
類
八五〇〇
九
一三七函
一架
四九冊

内閣文庫
和書類
八五〇〇號
一三七函
二架冊

内閣文庫
番號 和 8500
冊數 49 (2i)
函號 137 2

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan

古事記傳十七之卷

神代十五之卷

本居宣長謹撰

故火照命者爲海佐知毘古（カレホデリノミコトハウミサチビコトシ）此四字以音而取鰭廣物鰭狹物火下效此（テハタノヒロモノハタノサモノヲトリタマヒホリノミコトハヤマサチビコトシテケノ）遠理命者爲山佐知毘古而取毛麁物毛柔物爾火遠理命謂（アラモノケノニコモノヲトリタマヒキコヽニホヲリノミコトソノ）

明治九年購求

其兄火照命。各相易佐知欲用。
イロセホデリノミコトニカタミニサチヲカヘテモチヒテムトイヒテ
三度雖乞。不許。然遂纔得相易。
ミタビコハシヽカドモユルサザリキシカレドモツヒニワヅカニエカヘタマヒキ
爾火遠理命。以海佐知釣魚。都不得一魚。亦其鉤失海。於是其兄火照命乞其鉤曰。山佐知毋
カレホヲリノミコトウミサチヲモチテナツラスニカツテヒトツモエタマハズマタソノツリバリヲサヘウミニウシナヒタマヒキコヽニソノイロセホデリノミコトソノハリヲコヒテヤマサチモ

己之佐知佐知。海佐知毋己之佐知佐知。今各謂返佐知之時。
オノガサチサチウミサチモオノガサチサチイマハオノヽサチカヘサムトイフトキニ
佐知二字以音其弟火遠理命答曰。汝鉤者。釣魚不得一魚。遂失海然。
サチニソノイロトホヲリノミコトノリタマハクミマシノツリバリハナツリシニヒトツモエズテツヒニウミニウシナヒテキトノリタマヘドモ
其兄強乞徵。故其弟破御佩之
ソノイロセアナガチニコヒハタリキカレソノイロトミハカシノトツカ

ツルギヲヤブリテ イホハリヲツクリテツグノヒタヘドモトラズトタ

十拳劔。作五百鉤雖償。不取。亦

チハリヲツクリテツグノヒタヘドモウケズテナホカノモトノハリヲ

作一千鉤雖償。不受。云猶欲得

エムトゾイヒケル

其正本鉤。

海佐知山佐知を直ふ宇美佐知夜麻佐知を訓をし。海之山之を添ふ下ろも皆同じ書紀ふ海幸山幸を書ふを幸此云左知を而も桜も幸は意のみりハ非ず幸を心得てハ下ふ至りてかるはゆと佐知を幸取ふて伎を省て登理を切て知を云ふり。登理を知を云例多し。さてもまだ幸を云は凡て身ふ付る事ふ吉き事ふ云。福字を此ふ書も。此ふて海ふて諸魚を得を海佐伎を云山ふて諸獣を得る伎。山佐伎を云凡て物を得るハ身ふ付ふ吉事ふる故ふ幸を云ふり。さて其海山乃佐伎を取賜ふを以て幸取彦を申ふるを。次の文ふ取鰭云く取毛云くを而ふ取を思ふ誤し。万葉一二十四六十四六丁二四丁六丁なを得物矢。此を。ト。モヤを訓ハ誤を。師のサ。五九丁ふ佐都由美三十八丁ふ山能佐都雄十三十九丁ふ薩雄又五丁佐豆人ふを佐都も佐知を同じ。薩摩てふ地名も此

幸取彦ゝちめ住給ふ因て弟日本紀竟宴
歌ふ火遠理命を夜麻讃智比胡やゝ白ゝ
狹物ハ上ふ出傳十六の○毛鹿物毛柔物ハ氣能阿羅
母能氣能尓古母能ゝ訓ゝ廣瀬大忌祭辞ふ和支物荒支物やあるふ依て伎
を添て讀ゝ中ゝふわろ諸獸を云ふ古の雅言ゝ氣
き伝ゝ上に云るゝ如し
母能又氣陀母能毛以て云ふ名ふて同じ和名抄ふ獸を
介毛乃畜を介太毛乃ゝ分ゝ風ゝいうゝ
由ふ介太毛乃毛津物やゝ聞ゝれ書紀保食
神段ふ又鬱山則毛鹿毛柔亦自口出龍田風神祭祝詞
ふ山尓住物者毛乃和物毛乃荒物遷却崇神祝詞
祭祝詞ふ山野尓住物者毛能和物毛能荒物ゝ見ゆ

書紀ふ兄火闌降命自有海幸弟彦火ゝ出見尊自有山
幸一書ふ兄火酢芹命能得海幸故号海幸彦弟彦火ゝ
出見尊能得山幸故号山幸彦兄則毎有風雨輒失其利
弟則雖逢風雨其幸不惑一書ふ兄火酢芹命得山
幸利弟火折尊得海幸利此ハ海ゝ山ゝ沈相○各ハ師
乃加多美迩ゝ訓ゝ誤ふ傳ふ
まで弟係ゝ○欲用ハ母知比豆牟ゝ訓ゝ宜し互ふ
欲字ゝき ハ今ハ真福舊印本用の假字ハ源仲正家集
寺本延佳本ふ依ふ
ふ元日恋千代まで影を訓ゝて逢見ゝ祝ふ鏡
の用ひゝ弟ゝ夫木集世二ふ載ふ又後ふ藤原経衡家集に此同人宇治殿

餅をおくるを。者にも何もつけも彼も此中に心うるを
うバ是を用ゐよ。から。君が代を心用ひろうるき
をいうなる人の。餅ゐ云かを。ゐ依て定を。仲正
ハ。後撰集の作者をもばいまゞ假字の乱をざわしほ
ゞ彼わ。りちひりちぬりちふるゝ活用く言ゐて。恋強
なゞゝ同格ちて此の佐知も。下おるも上の海佐知山
の活きちり。皆同じ。

佐知乃佐知ゝ同ゝて。幸取ゝ。上なるは幸狩取人
を指て云。又毘古ゝ彼ゞ名れバ。取ハ。ゝゞゐ取事を指
ゝ。永取拖取ゐゞゝ。其人ゐ指て。某取ゝ云例
此例ゐ他ゝ言ひも多かり。此廻おるゝ。幸を取具
を指て云ゐ彼。欲用ゝつる狩以て。其具を指て凡て
云ゐ。狩をちをほゞ。

用乃言ゐ。其具の名ゝもちれる例多き中ゐ火を取器
を。火取ゝ云彼ゞ。和名抄ゐ。薫正ゝ同じ。然もバ海幸
爐比度利。

取彦の幸取ゝ。海ゐゝて魚を取具にて。釣鉤彼ゞちり。
即書紀ゐ。幸鉤ゝと。山幸取彦の幸取ハ。山ゐゝて獣ゐ
つり。幸鉤ゐ。

取具ゐて。弓矢彼ゞちり。即書紀ゐ。幸弓ゝも。幸取
幸ゝのみ心得てハゐゞゐゝ。佐知ゝ云ゝ。此ゝて知ゝ。書
紀ゐ。欲易幸ゝ書れゝも。移ゐ。幸を脇ゝてハ。文字のう
ゐ聞えがゝし。取幸具を易む。ゝ云意なゝでハ。聞也ぬ事ぞかし。○不許ハ。由流佐邪理
伎ゝ訓ゐ。師ハ。ウナ。ヅ。ル。サ。バ。リ。キゝ訓もき書紀ゐ。
不聽ゐゞ。然訓ゐ。此も古言ゝハ聞也ぬ
ゞも。ゝうゐる例を未見ゐ。由流須ゝ云言。○纔ハ事
ハ。武烈紀平群臣鮪の哥ゐも有て。慥ゐり。
乃。かゐゞゐ。始て其處ゐ及びゝゝ如き意にて。纔字の注
ゐ。一入色之淺也ゝも。始也ゝ。甫爾也ゝも見え。ゝ
僅字ゐ注り。纔能也ゝもつる。よゝ叶ゐ。此意より轉
ゐて。少許のゝゝを。和豆加ゝ。此ゝ。三度まで乞賜ゐ

ぎと許さぬまでわれ強てをて辛くもてかばぐかに易賜
ぬを云なり俗言かやうくを易○得相易ハ延加幣賜
ぬを云意なり
比伎を訓ばし得を延を先讀べき由ハ上傳十二のかに十七葉
委曲かに云ひて此幸取易ち事此記ては弟命の御
方よりを賜ふ故なり書紀も本書及一書にても兄弟
互に相語らひて易給ふ又の一書かてハ兄命
乃方よりを賜ふなり此三の傳の中に兄命ち方よ
りを賜ふ故ぞ此段乃終までの趣りをく叶ふをる
ぬ其傳かそはじをかに兄則毎に有風雨輒失其利弟則
雖逢風雨其幸不感をのもば易てむを所欲る由縁さ

ふ知られて いよく明らかし然をバ此記の傳ハ紛ひ
誤る物なほなし○海佐知られも海かて幸ち取る
具をいふ後を上ち同じ云ふを又佐知をしるバ幸ち意を
云ふを聞ば以海佐知釣魚を
えが書紀かに弟持兄之幸鉤入海釣魚を弟取兄
鉤鉤入海釣魚なをのるを照して知べし師ハ此記か
かの鉤字脱ぬ云ふを其ハ佐知ち幸の
意かに見られるかなり幸取の意を見るをきハ鉤
をいはぬを釣魚ハ那都良須尓を訓ばし魚
のうをかなるべし○釣魚ハ那都良須尓を訓ばし魚
を那を云ふを上かに出るを傳十四の万葉五二十
多良志比賣可美能美許登能奈都良須等美多く志世
利斯伊志遠多礼美吉和名抄かに声類云釣設鉤餌取魚

也。和名都理字鏡ノ釣ノ伊乎豆留。○都ハ加都豆ヲ訓ル

ヒ。万葉四十三丁ノ花勝見都毛不知恋裳摺可聞十九丁

ノ木高者曽木不殖十三二十四丁に恋云物者都不止来此都

ハ今本にヲスベテヲ訓メヲ四ヲ訓ベシ。○不得一魚ヲ比登都

登ノるノ效テカツテヤ

毋延賜波受ヲ訓ル。漢文ノ中に一魚ヲハ書レヲ魚ヲ上ノ方ヲバ又讀ムヲ類ル。

○鉤ハ都理婆理ヲ訓ル。書紀ノ知ヲ訓テ古名ヲ心得或

ハ其知ヲ都理婆理の切ハ。ムヅカシキヲ知ヲ訓ル所ヲ名ノ所ヲ知ヲ

紀ノ踉蹌鉤此ヲ云須ク能美賦ヲ彼ノ海佐知ノ知ヲ鉤ヲ心得彼此ヲ以テ出テ又此記

ヲ誤ルヲ字にあるヲ言にヲ加の須く能美賦ヲ乃賦ヲ鉤

波理ヲ云ハ物縫針乃名にて其ヲ曲テ鉤ノ用ヌ

ヌヲ釣針ヲ云ノ書紀神功巻ノ勾レ針ヲ為レ鉤ヲ如ル。或人翻譯名義集ノ婆利翻曲

鉤ヲ云ルヲ引テ波理ハ梵語ヲ云ルヲ本末ヲ辨ル。曲鉤ハ波理乃本義ノ非ルヲバ末の

自似ルに。さて此鉤の下ノ佐閇ヲ云辞ヲ添テ讀ル

し。魚ヲ得給ハざるの子ヲ父鉤ヲさヲ失ヒ賜ふ

ル。書紀ノ此処ノ兄命ノ山ノ入テ獸ヲ猟ルに其ノ事ヲ得ざりし事ヲ云ル況此記ノ海の方ノ事

のみを云ルヲ山の方ノ事ハ。○失海失ノ言ハ。万葉

用ノ故ノ畧ノ所ノ故ノ畧ノ所ノ。十五三十四丁に安我之多其呂毋宇思奈波受。○乞其鉤ヲ

の鉤ハ。ムヅ波理ヲ訓ル。初ノ如ノ所ノ云ノ故ノ。

の定ノ所ノ。次ノ如ノ波理ヲ云ル。語

ノ法ノ。○山佐知毋云ク。海佐知毋云ク。ノ佐知

ヲ皆幸取テ其具ノ云ルヲ上ノ同ジ毋ヲ辞ヲ

己之ハ人くより己己之がゝり。俗言に面くゝ之。まゝ手前手前之がゝ云ゞ如し火照命の自云己ハ。佐知佐知を重祢云ハ。凡て物を相對て云をきより古言より格りて。山佐知の方ハ海佐知ハ對て。海佐知乃方は山佐知ハ對て云ふる足。ちゝ例を万葉九三十三丁ハ遠津國黄泉乃界冊蔓都多乃各ゝ向ゝ天雲乃別石往者ゝを弟より身ハうれる波ゝ乃ふりて。只一人の事ゝるを向くゝを重言ふこゝを此世ハ留れる吾身ハ對て。なり。又古今集恋哥に思ふぞち一人くゝが恋死ゝば誰ハよゝを身て藤衣著む此を思交をる男ゝを女の中ハ何方にまれ一人ゝ若恋死ゝば。ゝ云意ゝ

ゝ。一人くゝを云ゝ此も今一人ハ對てなり。竹取物語ハ一人くゝに逢給ふ此も幾人をゝ中にて何をハまれ一人を云ゝ其餘の人ハ對て云足。大和物語ハ一人くゝに逢ゝバくゝれも同じ源氏物語若菜に一人くゝ罪をゝきゝは推本ハ一人くゝなゝ。皆二人乃間にて何方にまも一人ゝゝバゝゝゝ。今一人ハ對言足。今世ハ心以て思ふバ一人くゝ。一人毎ゝ云ゝ如く聞ゝ。然り非ゝ。又ゝゝ。ハ礼記曲礼ハ二名不偏諱ゝ云ゝ。二名ハ二字ハ名を云足。こゝ二字の名乃中にて上字ハ下字にまも離て一字ハ諱ゝ云ゝ。ゝ云ゝゝ。ゝを訓ゝを古言ハ例ハよゝ當れゝ。ゝ訓ゝ大ゝ。ゝ。ゝ以て曉ゝ。山佐知毋海佐知毋己之佐知くゝを見ゝバ早く心得ゝ。

○今ハ伊麻波ゝ訓ゝし。俗言ハ毋波夜ゝ云ハ當れ足。○各ハ此ゝ淤能淤能ゝ訓て宜し。ちて此処乃語の凡てハ意ハ山辛

取の弓矢も海幸取の釣鉤も已已が本より得ざる幸取あれば久〳〵易置ぎきかの非ず互かに既に試ずと雖今ハ已く本の如く返さ爭ずかわ○強ハ阿那賀知尓ず訓ぶし書紀かに多く然訓ぶ此言ハ孔穿かず云らずかるぎし○乞徵ず許比波多理伎ず訓ぶし万葉十六ニ十ニTかに課役徵者○破ハ夜夫理豆ず訓ぎし凡て夜夫流ず成の反對かて壞字毀字かぶ沈ず當ふる其意かぶ叙をやぶるず銷鑠を云○五百鉤ず伊冨波理○一千鉤ハ知波理ず訓ぎし○償ハ都具能比ず訓ぎし字鏡かに貳豆久乃布ずと俏還也復也報也豆久乃布ずぎかぶ償字書かに酬也ずも報也

ずと還所直也○猶ハ左右かに償ふを聽ず忘て其ハ猶ずも注ずぶ不欲ずかに意らり云ふ言に押てずかに乞意かるずぶ俗言かに是非ずと有てもず云意かずいふかかに試み考て他ず何ずも宜しからず猶此ず物語文ずかに物を彼此ずて宜しられず終かに思定ずる処ず云る猶也是かぶ云字ず上かあふ意ずして猶云ず見ても通也其時ハよの如ず猶ずり○其正本鉤ハ加能毋豊能波理ず訓ぎし正字ハ讀ぎうぶ下かず其本鉤ずかぶ書紀かも故書紀かに始兄弟二人相謂曰試欲易幸遂相易之各不得其利兄悔之乃還弟弓箭而乞已釣鉤弟時既失兄鉤無由訪覓故別作新鉤與兄兄不肯受而責其故鉤弟患之即以其

横刀鍛作新鉤盛一箕而與之兄忿之曰非我故鉤雖多不取益復責〻〻一書小時兄弟欲互易其幸故兄持弟之幸弓入山覓獸終不見獸之乾迹弟持兄之幸鉤入海釣魚殊無所獲遂失其鉤〻〻一書小時兄謂弟曰吾試欲與汝換幸弟許諾云〻俱不得利空手来帰云〻故別作新鉤數千與之兄怒不受急責故鉤

於是其弟泣患居海邊之時鹽椎神來問曰何虚空津日高之泣患所由答言我與兄易鉤而失其鉤是乞其鉤故雖償多鉤不受云猶欲得其本鉤故泣患之爾鹽椎神云我爲汝命作善議即造无間勝間之小船載其

船以教曰。我押流其船者。差暫往將有味御路。乃乘其道往者。如魚鱗所造之宮室。其綿津見神之宮者也。到其神御門者。傍之井上有湯津香木。故坐其木上者。其海神之女。見相議者也。

訓香木云。

加都良

海邊を宇美辨多と訓ぜし。書紀に海畔。古今集恋三に世をうみぢにと云へるは。万葉十二に淡海之海辺。多波人知。後撰集に多とはみ弟。万葉十四に宇奈比て辺を比と云ふ。山備濱備の類。古言に多し。然ればバ宇奈比ハ海辺と聞ゆ。又地名のみ疑あり。此外に正しく海辺を然云る例未見ざれバ。然も訓ずるに。未だ此も海辺を先讀て泣患を後に讀ぜき語のまさるなり。凡て上に云へる下に云へるかよりて。

其ノ言。重くも軽く〇塩推神ハ。一柱の神ノ名には非ず。凡
もなるゆゑぞ。
て物をよく知識る人を云称にて。名義ハ知識大都知なり。大ハ例の美称。都知も。野椎神の処に云るが如く。例多くして。美称なり。書紀には塩土老翁。また一書に。塩筒ともあり。都知と都くとハ。通音にて同じ。続紀卅九に。賀茂朝臣塩管と云人ノ名も見ゆ。老翁とハ。かゝるが尊みても云称なれバ。凡て年老たる人ぞ。物をばよく知識る者なれバ。此ハ実に翁ならでもあるらむ。書紀に。有二一長老一とあるハ。老翁てふ称に就ての。例乃撰者の文なれども何家なし。さて神武巻なる塩土ノ老翁も。物知なる翁といふなるなり。又事勝国勝長狭神をも。亦名塩土ノ老翁とあり。これも物知なりし神にて。此ノ称をありしなる

む。帳に。薩摩ノ国頴娃ノ郡枚聞ノ神社あり。これ此段の塩土ノ神を祭れる社なりとぞ。今ノ世に開聞が嶽と云ことなり。〇虚空津日高乃御事ハ。下に申次べし。〇易鉤。此ノ所にさへ足らざ。文字も脱たるならむと師ハ云き。信にかくのみにては。互に鉤と鉤とを相易賜ひし如く聞えて。紛らはし。然れど持し字の落たる物とも見えず。本よりかく如是ぞ有けむ。さるハ弓矢と鉤と易賜ふ佐知とハ弓矢の事ハ。此に用なき故に畧きて。一方のみを云るや。古ノ文なら。〇汝命ハ。那賀美許登と訓べきなり。上傳七の五葉に云ふが如し。〇為ハ。美多米にと訓べし。万葉に。御為と多く見ゆ。奉為と書るをも。然訓こ

となり。○議ハ許登婆加理と訓べし。万葉四五十四丁に事計為與。十二十二丁に事計吉為。此他も多し。○无間勝間の麻那志加都麻と訓べし。无間ハ書紀に無目と作る意なり。間ハ借字。加都麻ハ堅津間の約まりたるにて。書紀にある即堅間是なり。師ハ此書紀の字に依て勝間と書れども。みな加多麻と訓べし。と云れき。此記の字ぞうし。加多にも勝と書る所も多なし。又次に引る如く。地名なるにも加都麻と云る多かるをや。然れば古へ加多麻と云しは籠の編る竹と竹とも加都麻とも云しなり。の間乃堅く密りて目の無きを云り。中巻に八目之荒籠。書紀に大目麁籠籠なるを云るハ。目の麁きを云り。さて加多麻を云を九て籠の古名と心得て。右の麁籠なるをさまにアラカタ。下を訓むは非なり。麁きをかくさまには云べき由なし。許と云べし。本より總名なりハ何なり。係籠と云も布多許

の切なり。とにかくにて。かゝる蓋のある籠の名なり。されば万葉らにても。總て此名をば許ありしこと知べし。十二丁九丁廿九丁廿四丁に。玉勝間と書るも。此物なり。和名抄に。周防國佐波ノ郡勝間ハ加都万。讃岐國三野ノ郡勝間ハ加都万。三代実録廿七に。筑前國賀津万ノ神。万葉十六に。勝間田ノ池。これらみなる。此物に因ある地名と聞えたり。加都麻と訓べきこともありしにても知らし。又式に紀伊國名草ノ郡堅真神社となり。さて和名抄に唐韻云。籠竹器也。和名古。まさ四声字苑云。笭箵小籠也。漢語抄云。賀太美。と云る賀太美は。加多麻乃轉れるなり。古今集よりしく後の哥どもにも。皆加多美とのみよめり。さて小籠をしも加多美と云るは。東と違へり。加多麻ハ。ありし大きなるにも小きにも云りし名なればなり。○小船ハ。此は必しも船の形に造れりと云には非じ。何物にまれ乗て水を行物を。船とは云係ある例

志書紀ハ以充目堅間為浮木ヲ云フルヲ同ジ和名抄ハ唐韻云艇小船也釋名云二人所乘也楊氏漢語抄云艇乎夫祢（）押流其船ノ其ハ此ヲ云ヒキ処ハ故今ハ然訓ル（）差暫ハ夜ヒ志麻斯ヲ訓ヒ差ヲ夜ヒヲ訓ルハ万葉七（二十七丁）ハ暫ハ同十五（十四丁ハ思末志久毋十八（六丁）ハ布祢之麻志可勢ハヲ云フルに依て訓ル（）味御路ハ書紀ニ可怜小汀ヲ云フルヲ可怜此云于麻師ヲ注シ又可怜御路ヲ甚善道ヲ云ムガ如シ此ハ御路ヲ書ハ美知の本義なり此処ハ所以ヲ常ハ道ヲ書ヒ知ヲ云ヒキハ美知ヲ云て

ヲ添ヘ名なり此処ハ甚善道ハ由ヲ云ハ處ニて美てハ言用て重キ故ハ本義の随ハ書ハ理ヲ訓ヒ此道ハ尋常の陸ある道ハ水中ハる故に乘ヲ云ハ海路ヲ舟ハ乘ヲ云ル路而行時云ヒヲ云ルなるハ路乃ハ異ハ又霊異記ハ乘ハ云ヒも別ヲ但し此ハ其ハ准て道のハ云ヒ此記の例ハ云ヒ乘ハ字ハヲ書ヒキハ非ヲ又書紀ハ尋路ヲ云フルヲバ此ハ乘字ハ尋代誤ルに也思ハるヲ然ハ云フ（）往者ハ伊麻志那婆ヲ訓ヒ凡て由伎坐ヲ云ヒキ伊麻須ヲ云ハ古言に常多し中巻明宮段大御哥ハ須久ミ登和賀伊麻勢婆此餘万葉ハ多く

（万葉十一ハ海原乃路ハ乘哉云ヒヲ求る

見ゆるは、彼大御哥の下に引て、委く云べし。傳卅二の三十九葉

○如魚鱗所造之宮室、魚鱗は伊呂古と訓べし。和名抄に、唐韻云、鱗魚甲也。文字集畧云、龍魚之属、衣曰鱗。和名以呂久都。俗云伊呂古。字鏡には、鰭魚脊上骨。又伊呂己とあり。和名抄に、伊呂久都と云るは心得ず。又伊呂古をば、俗云とあれど、俗には非じ。さて又こゝを今は宇呂古と云。此宇と伊とは、何れか古からむ。魚をも、中昔には伊袁と云しかども、今は多く宇袁と云を、古言にも宇袁と云り。然れば鱗も、中昔にこそ伊呂古と云を、古のみ云り。古言は宇呂古なりけむも知がたし。されど古書に然云る例未見ざれば、姑和名抄に随ひて訓るなり。さて如魚鱗と云は、壯麗く大きなる宮乃殿門など、数多並立連て見ゆる状を、譬へて云るなるべし。屋上の甍のさまを云ふが如くにも聞ゆれど、然らばいふまじ。

さては所造と云るにうべし。宇都保物語藤原君巻に、四面四町の殿に、面ごとに御門を建て、伊呂古の如くに造て重ねさせおかれたるに云く。おほかるは殿舎なり。又梅花笠巻に、色々のかずはあれど、伊呂古のごと打渡して云く。なぞ心ある人も物の稠く重なりて連れるさまなるを譬へなり。かゝる例、楚辞の九歌、河伯篇に、魚鱗屋兮龍堂、注に、言河伯所居、以魚鱗蓋屋、堂畫蛟龍之文云々、形容異制、甚鮮好也云々、河伯水神也、故託魚龍之類、以為宮室也とあり。又霊何為兮水中、注に、言河伯之屋、殊好如是、何為居水中而沈没也。又乗白黿兮逐文魚、又魚隣々兮媵予、注、媵送也、言江神聞己将帰、亦使波流滔々来迎、河伯遣魚隣々侍従、而送我也。など云へり。凡て此段といふよりも似たる事あれば、如魚鱗造と云も、此文を取て書るならむと云説もあれども、彼は直に魚鱗を以て屋を葺るよしなり。此は其状を譬へたるなれば、其趣異なるをや。なほ又凡て乃事の似よるは常乃

論ひき下かりり。書紀に其宮也雉堞整頓臺宇玲瓏まゝ城闕崇華樓臺壯麗なゞりの系ゝ之なるに漢文を餝まる物なて。ちゝに古言かかはざるなり。宮室ハ二字を美夜と訓ばし。さて如字ハ上に有字のるばく若無くとも阿良牟と云言を讀附ばきが如くなる也。上に將有味御路とつゝひ下にも有湯津香木と云ばつのり同言ハ重らむ事厭ひて此ハおとちゝに省けば係るゝむ。さて有むと云ざるとも其意と聞えて足ハ恐らくちゝ也せ更返て語乃勢宜くぞのり係。○其ゝ曾礼と訓ばし。上ゝる物を指て云言なり。書紀景行

巻に有女人曰速津媛為一處之長其聞天皇車駕云ゝ。ゝゝ以討土蜘蛛若其畏我兵勢云ゝ。凡て書紀ゝ抄ゝ先て漢文さかに書れゝ係ゝ。ゝゝ其ハ漢文乃格りハゝ。ゝひて古言乃例ゝ。ゝれりハゝゝゝは更ゝて返てかゝれよきゝゝゝるなり。万葉十三丁に衣社薄其破者伊勢物語に女御高子と申ゝいゝかりりて。そゝうせ給ひて云ゝ。なお物語等に此ゝゝひ多く見也。○綿津見神ハ上に大綿津見神ありて名義なぞ其延り云て又御禊段に底中上と三柱綿津見神のて其ゝ阿曇連ゞ祖神に坐ゝ。其延に見也て姓氏録に安曇宿祢海神綿積豊玉彦神子穂高見命之後也ゝのるゝ書紀此段一書に海神

豊玉彦尊ある歌に合せて見れば此乃綿津見神ハ即
彼御禊段のなかを万葉九十八丁詠浦嶋子哥に海若
神之宮乃内隔之細有殿尓云々此哥凡て此段の趣を
見ばしたて海神の宮ハ海の底なる国なり後世の物
はなさかしく説ぎとハ古傳の趣なかるハ是佛書の龍宮を云
物あるを其説なるなりかやしくしるよく似
なる処なるを故書紀の口決纂疏なぎかを此海神宮を
直に龍宮をぞ云ふなる佛書を信ぜる人ハ然主客の
語乃別まを分ぎふなくて彼所謂龍宮を主とを忘て云ふ
なるなり又漢籍ふもなるなく水神宮ハ事を云なるなを
て其はなよく似なる故なるかふうくに此段を異國書
ふ依て造きるなるのうを疑ふ人あるを此ぎそハ
なぎ異國書ぞのみ信みなく皇國の古傳をバ信ざるを
のなを凡て皇國乃ハ其書なる後ふ出来なを其事ハ
神代なる語傳を来なるはいなきバ古よなく古きを

異國乃説ぎとハ其書なる此方なるやい先なを説
なる事バ已ぎなかしらのみ多くなを古乃おいなる孫
なぎ迄を皇國書なを遥ふ後なるを然もバ此段の傳説
ハ真なる本なる佛書の龍宮ハ此綿津見神宮なる事の
上代ふおのなぎなる天竺なぎにもかとはし傳ハを
なるふ種なぎの事ぞ造加なを説なるなるを又漢なみ
ふも似なる事のなるも然なを尊なを皇國ハ萬國お
御照し坐天津日大御神の本御國なれバ凡て萬の事
も物もみな皇國ぞ本ふして主ふを忘て他國なぎを
のなるなる流も及ぎしなるものなるて相似なる海なるもを
なるなるなるハ彼が吾ふ似なるなるなるを吾が彼
ふ似なるにも非ぎ然なるぞ世なるの物知人みを此元の
本末をバ得知なるぞしなるバ後ふ萬の事を物を異國
を学ぶ異國なるを来を又物語書なるぞふ異國の故事を
取て作をかを分なるなるなるはなるなるぞふ倣ひて萬の事
みふ異國を本なる心得なるかなる神代の故事なるぞぞさを
ふ其類なるを疑ふなるなる異國書ふ惑を分なるものなるよ
ぞや本末ハ忘ばしなるかきなる天地乃中ふ人の形を始を
て山川草木其餘の物も皇國漢天竺なる大なる異なる
なるなるなる皆なるの説なる同じなるなるを古なる傳を事

なれども。此方なる彼方なる。なほなかにも同じかれあるもあらざら事。同じかりけるに。必彼を学びよりなる思ふなれども。おのが愚なるを。人の形も何物も。彼を学びて造らずとも。おのづから同じきにいたる事也。さて又近き代の。なまさかしき人の心ならは。水中に宮室などのある理なし。かくなる思ひなるゆゑ。かの龍宮などなる説もあり。信じ。此段の事跡も。実に海底ならは非なりと云て。或は薩摩國近き一ツの嶋なりといひ。或は琉球國なりといひ。或は對馬なりとかやも云て。其證なりとなど云るもある。允てさる類に。皆古傳に背ける。例の儒者意の私事なり。さばかりとかかしく。漢意をもて書紀ともに説き。内ニ彦火々出見尊於籠中。沈之于海。すなはち海底ニ自有ニ可怜小汀。あなずらへば。海底なることは。いともらぬ語りても。忘るる記りけるも也。○井上ハ韋能辨と訓ぬし。和名抄に。河内國（志紀郡）に井於。甲斐國（山梨郡）に井上など云郷名あるて。共に井乃倍なるるに依りけり。（式に大和國平群郡猪上神社。万葉七に井上。こゆるも地名あり。）井のほとりなり。○湯津香木なる事ハ。上天若日子段に。湯津楓なるありて。其処に云へり。（傳十三の二十七葉）○其木上との上ハ下に對ふ上なり。（井上の上なハ異なり。）次に登其香木なる有て知るべし。○海神ハ。和多能迦微なる訓べし。（他古書にも常に和多都美神にも。海神とも書るとぞ。此記りハ。書別けるり。）○相議者也。こは上大國主神段に。御祖命告子云。可参向須佐之男命所坐之根堅洲國。必其大神議也。とあるに同じ。其前後の文てなる事乃趣もよく似たるを。考合すべし。（傳十の卅三葉）さて是ゆゑ。塩推神の教奉れる語なり。○註。訓香木云加都良木なり。舊印本などに。訓香云加都良木なりと係る。香下なる木字を。（二行にて並べるに因て。）誤て良下に書係る

ヲ。又真福寺本延佳本ともに香下良下共ニ木字あ
リ。其ハ非なり。良下ニ木字ハ決て訓を用ふべからず。例ハ出雲
ともなり。且加都良紀ニハ云ふ〳〵ハ。若又加都良
能紀なるべし。必能字も有ぬべき歟。さるバ此も香下良
る木を誤て良下ニ書ル本ハ見て香下ニ脱ル歟。さるを
をバ出雲て補ひなゞ。良下ニ誤るゞ錯なるべしを
バ。えらべざ故今ハ一本ニ従ひ書紀一書云時有一
老忽然而至自称塩土老翁云〳〵。老翁即取嚢中玄櫛
投地則化成五百箇竹林因取其竹作大目麁籠内火〳〵
出見尊於籠中投之于海一云以無目堅間為浮木以細
縄繫著火〳〵出見尊而沈之所謂堅間是今之竹籠也又
一書ニ是時弟往海濱伫佪愁吟時有川鴈嬰罰困厄即

起憐心解而放去須臾有塩土老翁来云〳〵又一書ニ時
遇塩筒老翁云〳〵計曰海神所乗駿馬者八尋鰐也云〳〵
文長なるバ此ハ畧き。なゞ
ぬ。本書を披き見べし。
ならば。ちゃ〳〵各一ッの傳ヲ為ル。

故隨教小行備如其言即登其
香木以坐爾海神之女豐玉毘
賣之從婢持玉器將酌水之時

於井有光。仰見者。有麗壯夫。訓壯

夫云遠登古下效此以爲甚異奇。爾火遠理命見其婢。乞欲得水。婢乃酌水入玉器貢進。爾不飲水。解御頸之瑛。含口唾入其玉器。於是其瑛著器。婢不得離瑛。故瑛任著。以進豐玉毘賣命。爾見其瑛。問婢曰。若人有門外哉。答曰有人坐我井上香木之上。甚麗壯夫也。益我王而甚貴。故其人乞

水故奉水者不飲水唾入此璵
コハセルユヱニタテマツリシカバミヅヲバノマサズテコノタマヲナモツバキイレタマヘル
是不得離故任入將來而獻爾
コレヲハナタヌユヱニイレナガラモチマヰキテタテマツリヌトマヲシキカレ
豐玉毘賣命思奇出見乃見感
トヨタマビメノミコトアヤシトオモホシテイデミテスナハチミメデヽ
目合而白其父曰吾門有麗人
マグハヒシテソノチヽニアガカドニウルハシキヒトイマストマヲシタマヒキ
爾海神自出見云此人者天津
コヽニワタノカミミヅカライデミテコノヒトハアマツ
日高之御子虛空津日高矣即
ヒダカノミコソラツヒダカニマセリトイヒテスナハチ
於內率入而美智皮之疊敷八
ウチニヰテイレマツリテミチノカハノタヽミヤヘヲ
重亦絁疊八重敷其上坐其上
シキマタキヌダヽミヤヘヲソノウヘニシキテソノウヘニマセマツリ
而具百取机代物爲御饗即令
テモヽトリノツクエシロノモノヲソナヘテミアヘシテスナハチソノ
婚其女豐玉毘賣故至三年住
ミムスメトヨタマビメヲアハセマツリキカレミトセトイフマデソノ

クニヽスミタヽヒキ
其國。

備ハ都夫佐尓ヶ訓ゟし。上八千矛神の御哥に麻都夫佐尓ヶ而ゟ漏ゟこゝ為ゟく具備ゟる意ゟて。此ゟ塩土神乃教ゟし如くゟて。事ゝく俗言ゟいゟ一ゟくゟゟり。違ゟ陳らゟゟなき沖云ゟ。ゟて此処乃事狀ゟゟ教奉ゟ語ゟ委くゟ云ゟる故ゟ。此ゟハ畧きて。ゟゞ如其言ゟ云ゟゟり。○豊玉毘賣名義書紀一書ゟ父神の名豊玉彦ゟ而ゟとバ。其ゟ因ゟゟるゟし。父神乃名ハ。或人の説ゟ塩盈珠塩乾珠を解ゟゟゟれゟ名ゟゟ云ゟ。さゟと而ゟゟむゟ。又ゟゞ美称ゟてもあゟゟし。但此記ゟてハ父神ゟハ其名無けゝバ。豊玉ハゟゞ比賣の御名ゟて。容顔の美麗きを称ゟゟゟゟ而ゟゟし。山城國風土記ゟ久世郡水渡社。祇社名天照高弥牟須比命。和多都弥豊玉比賣命ゟ見ゑ。帳ゟ水度神社三座ゟ而ゟる社ゟり。神名帳ゟ阿波國名方郡和多都美豊玉比賣神社あゟ。同郡ゟ天石門別豊玉比賣神社ゟ云ゟ而ゟゟゟゟゟ。これハ如何ゟ由の名ゟゟら乎。○従婢ハ麻加多知ゟ訓ゟ。書紀ゟ此ゟ侍者ゟ書き。又欽明卷ゟ従女遊仙窟ゟ婢ゟゟ侍婢ゟゟ。皆然訓ゟ。前子等等の意ゟゟゟし。幣を省き右良を切て加ゟ云天皇乃御前ゟ候ふ臣等沖。前ゟ君書紀景行卷哥に摩幣便ゟ轉ゟて。まうちぎみゟ云。ゟ云ゟ。意ハゟ似ゟゟゟ。子等ゟハ女を云

古言なり。万葉にぞ哥に多し。子等ハ一人をも云、ハ良を多知を重なる
こゝ妨
○玉器ハ多麻母比を訓ぜし書紀武烈巻哥ゝ
栲摩暮比ゝ涤逗佐倍母理玉盌ゝ水を盛なり。和名抄
瓦器類ゝ説文云盌小盂也字亦作椀辨色立成云末里
俗云毛比毛比を俗云なり古名なり。万葉四ゝ片埦ハ埦字
の誤う。大膳式ゝ片埦十二口。片埦四十八口。片埦八十七
口。豊受宮儀式帳ゝ御水四毛比。御水六毛比。ゝ見え
なり。主水又云る母比を水を云。飛鳥井哥に御母比も寒しゝ
水を。凡て母比を云。但し池川なるゝゝ
ア其ハかの武烈紀の哥ゝ母比ハ。汲て飲む水ゝ名ゝ
名なる出む。ゝ
また内膳式ゝ瓶十一口。汲運水料由加十六

口。汲運水料なり。和名抄ゝ。俗人呼大桶為由加手介。主水式ゝ汲水料器ゝ缶
一口。土埦一合。加盤片盤五口なる見也。此外も水を盛器
種々式ゝ見也。後世ゝ井ゝ水を汲揚る
ゝハ。必縄なる著る都流倍を用ふる事なる也。和名
抄ゝ罐汲水器也。揚氏漢語抄云都流閇。上代ハ井ハ。浅き泉なるなるも多
うなるゝ加ハ。今ハ山里なり。盛器を以て直ゝ汲揚も
なるゝゝ然なり。
なるゝゝ此の玉器も盛器以て汲ゝてもあ
ゝ。又汲なる盛る料ゝても有ぜし。次の文り酌
進なるゝ水を入て玉器に貢
み乃料の器ゝハ非。書紀りハ此を玉鋺玉壺玉瓶ゝ
なる作なる。皆々モヒと訓ぜきなり。玉鋺をタマ
なる訓ぜきなり。麻

理も古き名ぞハ聞えしを。かわ鋺の事ハ下巻若竹取櫻宮段ニ隠面大鋺ぞ所ゆる延傳此ハニ云ばし。物語ニ天人乃ようほひ女山中ようり出来て銀の加多体ニ成持て水を汲あるく云々。○有光を加宜阿理ぞ訓ばし。書紀ニ見人影在於井中ぞ所ゆる。此ハ影字を訓ばき加ゞ波し。光字ハ書ほを思ひバ比加理ぞも訓ばき加ゞ也。さもぞ白檮原宮段ニ其井有光ぞ所ゆるかゞぞハ異ぞ。是ハ光明の所ゆるにも非ず。影を云なり。加宜ハ加ゞバやゝかゞろひるぞ云ゆゞ加ゞ。本同言なれバ比加理ぞ云て也。終ハ同意にぞ。火遠理命の樹上ニ坐ハ影の井ニ水ニうつるを見也賜ふ所り。○註訓壯夫云々。此注ぞ既ニ上大穴牟遅神段ニ有きバ又此処ニハ無くて所ゆるなり。○見其婢この婢ハ袁美那ぞ訓ばし。○

乞欲得水ハ美豆袁延志米余登許比賜ぞ訓ばし。えしよ
ハえさせよぞ云ゆゞ。万葉廿十丁ニ山人乃和礼尓依志米之夜
麻都乃曽許礼。○婢乃この婢ハ又麻加多知ぞ訓ばし。
○御頸之璵ハ上ニ出傳七の○含口ハ美久知尓布ゝ三葉
美豆ぞ訓ばし。書紀應神卷大御哥ニ府保語茂利万葉
十四三十五張ニ布敷麻留十八十六丁ニ敷布賣利十九四十六丁
ニ布敷賣流波廿三十一丁に保ゝ麻例等又四十三丁布敷賣里
之ゝ六十七丁ニ含而八十丁に含有ぞ所ゆる。所ゆて如
此玉を御口ニ含て唾出し賜ふ所ゆる由ニ
う所ゆる。詳ぞ解ニハ御口含給ふハ玉を嚼碎き賜ふるふやゝ思ひしかゞ下文

のまに然を聞えば若くハ玉を器に著て離さざるを
むる術ふやうなりし神代にハ此類乃術をなりく見也
神女に見せ賜ハむ玉を器に著て離さざるを為賜ふ故海
宮ハ遥に絶きて美麗きを見て凡人に非ることを知
らしをむとを以御所に為れる歟しなれよく考ぬ歟
きこと也○璵任著ハ多麻都氣那賀良を訓歟し万葉十
六二十九丁に角附奈我良○我井上の我を云言に用ひ
ざる何ぞや漢文を書て聞ゆる様も上代にもいひ
しらをにぞ有りし吾君ぞ云ふを古言なる
をそを同じ乃れバなり下なる吾門も同じ伊勢物語に
がみうぞ六十餘國を云るハ漢文の吾朝を取る如
くなるもぞ此も古言に違ひなせじ凡て右の類の吾
ハ故に云吾門吾家なぞ書紀に異なる故よかく論ふ
ふなり今俗言に許知能を

云意なり○我王ハ綿津見神を指て云なり伎美を云に王
字ハ書紀の海龍王を思ふに佛書の海龍王を皇國を
離れて外なる域なれ筋王を云なり況に皇國を
くなるを彼に古文に見ても非るが如
字なりし書紀にも我王なる文
らいハ阿賀伎美尓母麻佐理豆を訓なし尓母を此
婢乃心に常に綿津見神をのみ甚貴き物と思居に
ア乃を云る辞なり ゝバ尓を讀 書紀一書に告其王
て ハ其意足ハ文 書紀一書に告其王
曰吾謂我王独能絶麗今有一客弥復遠勝を可乃如
志○貴ハ此巻末なる豊玉毘賣命御哥に斯良多麻能
伎美何余曾比斯多布斗久阿理祁理万葉二十丁に春
花之貴在等催馬樂に安名多不止介不乃太不止左也

形容の語同じくして美く好き意なり是貴きめ本義なり
豆太占太祝詞太幣なるものの類乃太ものと同言ふて多布斗
布斗をバものをいふ呼故ふ異なるが如くなれども音便ふ多
も古ハ本音よりおいふ呼ばば同じ語なり○奉
水者ハよバ多豆麻都理斯加婆ものと訓ふ水字ハ讀ふ
かゝる次上ゝ水ものいふこと○任入將来ハ伊礼那賀良毋
ものハあれバなり
知麻韋伎豆ものと訓ふし書紀云門前有一井井上有一湯
津杜樹枝葉扶疏時彦火々出見尊就其樹下徙倚彷徨
良久有一美人排闥而出遂以玉鋺来當汲水因挙目視
之乃驚而還入白其父母曰有一希客者在門前樹下一
書ふ有一美人容貌絶世侍者群從自内而出將以玉壺

汲玉水仰見火々出見尊便以驚還而白其父神曰門前
井辺樹下有一貴客骨法非常云々一云豊玉姫之侍者
以玉瓶汲水終不能滿俯視井中則倒映人笑之顔因以
仰觀有一麗神倚於杜樹故還入白其王一書云門前有
一好井井上有百枝杜樹故彦火々出見尊跳昇其樹而
立之于時海神之女豊玉姫手持玉鋺来將汲水正見人
影在於井中乃仰視之驚而墜鋺々既破碎不顧而還入
謂父母曰云々ものかゝて玉を唾入賜ふ孔事ハ
書紀ゝハ何も乃傳ふも見ゆ○見感ものと美米傳豆ものと
訓ふし米傳てふ言ハ書紀允恭卷大御哥を始めて多

く見えたるもの。先ずうしろ。そ下ろ。れ。ぞ。も。此言より出たるなり。見感ハ。中巻白檮原朝段。倭建命段ゐぞゐも見也て。記中ゐ。見驚見喜見畏ゐ。ゐる類の古言なり。○目合の事ハ。上ゐ云ふ。傳十の五葉

○而白の而。字。延佳本又一本ゐにも無し。舊印本ゐも。而字ハ有て。白字を脱せり。今ハ真福寺本又一本ゐ有にしたがへり。○天津日高上ゐ出。傳十五の三の巻

○虚空津日高谷川氏。天津日高ハ天子の称。虚空津日高ハ太子乃称ゐ云ふ。此説古。意ゐ非ゐゐ如。信ゐ然る説し。其故を先。迹く藝。聞ゆ。よく考るに。命穂く手見命鵜葺草葺不合命。みな天津日高を申せ。係。ゐ。天津日嗣所知者を系ゐ。大御称ゐ。かく

て此を穂く手見命いまさ皇太子ゐて坐ほゐるが故ゐ。天津日高之御子を申せり。此。よてハ。天津日高ハ。此。尊の御称ゐを非ず。其を虚空津日高を称に所以ハ。虚空ハ。天を地を の中間なる故ゐ。天津日高ゐ亞て尊み申に御称ゐ系ゐし。常に也通ハして。天を蘇良を米を云こを也多きハ。地よりいふバ。虚空も天の方なもバ。故。今。世ゐ言ゐハ。上を蘇良を云とを ゐ系ゐ。ゐる地上即天ゐ云ハ。漢籍の意ゐ。云ゐ。書紀神功巻ゐ。於天事代於虚事代云く。ゐ。天を虚空を別言係例ゐ。書紀一書ゐ。白其父神曰。門前井辺樹下。有一貴客。骨法非常。若従天降者。當有天垢。従地来者。當有地垢。実是妙美之虚空彦者欲を ゐるは。

いろ〳〵異なる傳へなれども虛空彥を云称又虛空を天
を地をの間に取るなるべし此に似依るを御をなり
右は書紀乃意ハ天垢も地垢も云て虛空
を殊に勝るとも意に取るものを然るバ此記の
虛空津日高も其意を云ばなるべし此記ハ天津
日高を申に至て尊き御称ありて其御子を申ばなるバ其
に亞る御称なるを論なり然るバ虛空を天を地を
の中間に置べきと云ハ同くて其中間を强るかと
取るを勝るとなる方に取るなるバ異なりなるて此記に
を虛空津日高を申るを書紀ハ虛空彥を申なり迹と
藝命の御名は天津日高を申なるを天津彥を申なり元て書紀
りハ日高を申に御名なり此ハ思ふに當代の天皇乃
大御名永高を申せるを諱て撰者は心を以て
みを彥に改給ふなるかぞ申なるべきなるべ其を
みしきをなるて皇祖神の御名を改むべきにあ
云くを彥を云こを乃末乃天皇の御名に觸るバを
重るを云ふいうべ。

○美智皮書紀に海驢を作て此

云美知を申て釋に海馬也を注し海馬ハ漢名なり本草に陳藏器曰海驢
海馬等皮毛在陸地口決に海驢之皮在陸而潮滿則
皆候風潮則毛起
自起毛をのみ云て其物のさまを云ハ建長八年百首
に衣笠内大臣我恋ハ海驢の寐流も寐やらぬ夢なり
をかゞ絶やはてなむ夫木集紀國人の云く今紀の海
に阿志加を云物あり其處に昔より字に海馬を
書来れるより日高郡乃海中に阿志加嶋を云嶋乃あ
るに年毎の秋冬はてゝ多く来て岩上に睡て又波上
に浮びをゞるも熟睡て凡て寐るこれの遲き物なり
大きなるハ長さ一丈許なるもあり足を無くて水搔

の如くなる物あり。此物西國の海にあるなり。和名抄に葦鹿と云物を載て本文未詳なるせり。思ふに是海驢なるべし。俗云。或人云。阿志加ハ本草綱目に海獺と云る物なりと云。

或書に曰ハ。山東志に曰。海驢出て登州海中狀如驢常於秋月登嶋産乳其皮製為雨具水不能潤今按に海中に登騰と云物あり。岩屋の内に上る。よく睡る物なり。皮ハ馬具に用ふ。其首馬に似て大さハ小馬ばかりなるもの海驢なるべし。陸奥松前蝦夷又國々の海辺にも稀に有なり。と云。本草綱目に東海嶋中又或人の云く。出て海驢能入水不濡。今も北海に海驢あり。其皮潮満るハ柔に潮干るハ枯

乾て敷皮に成るなり。と云。右の説ども共肉何を正しく美智に當るべきかの紀國人乃云る阿志加と云物の地によりて名の異なるべし。或書に云る登騰と云ハ一物の海にて捕るとて水豹と云物を見せ物に出す事ハ聞えず。又近き年西國長さ三尺許にて阿志加乃ふぐひなる物を見えと正しく見る物なる故に云なり。水豹と云名ハ新に付る名なるべし。依るに足らぬと思ふ。今世に美智と云名ハ遺る地ハ無きにや。

尋ねて定むべし。○疊ハ白檮原宮段大御哥に須賀多多美伊夜佐夜斯岐豆倭建命御哥に多々美許母幣具理能夜麻能遠飛鳥宮段哥に和賀多々い弥多ぶるてに。いと古き名なり。皮を以て疊とせる例此次に引る。

弟橘比賣命云々。万葉十六。韓國乃云々。
をゝ皮疊絁疊をゝ以て見れば。上代には。甍茵
をゝ敷もゝ。凡て多くは美を云。
の大御寢に。菅疊を敷て。二人御寢坐しよりて和名抄
也。敷て寢る物を也。疊を云しらを知ら
ゝ。疊和名太ゝ美。此ゝ疊ゝ至て。皮絁をゝのをゝ疊ゝ
いは。甍茵席をゝ。おのゝ別ゝ。疊ゝ又品
品あり。長帖短帖狹帖半帖。又厚帖薄帖をゝ。帖字
ハ。疊を音を通ハして用る。おのゝ
綢端。錦端。兩面端。布端。緑端。黄端をゝ。
寮式。おゝ委ゝ見也。海人藻芥。疊事。帝王院纎
綢緣也。神佛。前半疊。用纎綢緣。此外更不可用者也。大紋
高麗緣。親王大臣用之。以下更不用之。大臣以下。公卿。小
紋。高麗緣也。僧中。僧正以下。同有職。非職。紫緣也。六位侍
黄緣也。諸寺諸社。三綱等。皆用黄
緣云々。四位五位。雲客。用紫緣也。○絁ハ伎奴ゝ。和名

抄ハ。絹。和名岐沼。帛。俗云波久乃岐奴。絁。和名阿之岐
沼。阿之岐沼ハ。唐韻云。絁。繒。似布也。を云
ゝ如ゝ。麁ゝ惡き絹を云。意の名なり。
各差別あり。古書ゝ。伎奴ゝ絹。字を也。絁。字
を也。通用ゝ。○八重ハ。例の弥重ゝ。ゝ。幾重も
を云。伊を。書紀ゝ。海神於是鋪設八重席薦以延内
之を。此。記中卷倭建命。段。弟橘比賣命の。海ゝ入坐
処ゝ。以菅疊八重。皮疊八重。絹疊八重。敷于波。上而下坐
其上。を。ありけり。万葉九十一ゝ。吾疊三重乃河原之
三重を。おゝ。然。を三重ハ。表中裏を云。おを云ハ。後世意を。
十六。一十ゝ。薦疊平群。又二十九丁。韓國乃虎云神乎生取尓。

八頭取持来其皮乎多々弥尓剌八重畳平群乃山尓八重畳なび七句ハみな序なり。又右ニ引る倭建命の御哥なぞみな畳ハ幣てふ言に係る序にて幣ハ即一重二重なる幾重も重ぬる物なる故に然ばかり言ふなるさて物を重ぬる多く年ゝを云ハ畳ゝ云名も重ぬるより物を廣き物を狭く折紙むるを畳ゝ云も折きば重なる故なり。然ばハ畳ハ上代ハ必幾重も重ねる敷ふる物なり。万葉十一に畳薦編数十二に畳薦重編数ゝ此ハ薦を幾重も重ね編て一つの畳にとゝやゝ後乃事にて上代の如く幾重も敷なきを便りよく一つに編重ねて厚く造成を用物なる故上代の畳も後世如く厚き物なるは見え後世神今食新嘗祭ゝ神座に八重畳ゝ云を設けらるるハ上代の儀なり。○敷其上の其字舊印本又一本ゝ

ゝかゝ具ゝ云ふ今ハ真福寺本延佳本に依る。○坐其上の坐ハ麻世麻都理ふゝ訓ふし書紀清寧巻に起栄宮権奉安置敏達巻に請其佛像二軀孝徳巻に迎佛像四軀使坐于塔内万葉十二十八に君乎座而この餘ふを麻世ゝ訓る詞ゝ多し令坐を約ゝ云る古言なり。○百取机代物上に出。○具ハ曽那幣ふゝ訓ふし祝詞に置足ふゝ云係ゝ同くて今俗言にそろえてゝ云意なり。俗に神に物を献る様曽那布流ゝ云ゝ具ゝ云て献るよりふ転もるなり。○令婚ハ阿波世麻都理伎ゝ訓ふし書紀一書云於是豊玉彦遣

人問曰客是誰者何以至此火々出見尊對曰吾是天神之孫也乃遂言来意時海神迎拜延入慇懃奉慰因以女豐玉姫妻之故留住海宮已經三載一書ハ是時海神自迎延入乃鋪設海驢皮八重使坐其上兼設饌百机以盡主人之礼一書ハ海神聞之曰試以察之乃設三床請入於是天孫於边床則拭其両足於中床則據其両手於内床則寛坐於真床覆衾之上海神見之乃知是天神之孫益加崇敬

「ニホヲリノミコトソノハジメノコトヲオモホシテオホキナル於是火遠理命思其初事而大

一歎故豐玉毘賣命聞其歎以白其父言三年雖住恒無歎今夜爲大一歎若有何由故其父大神問其聟夫曰今且聞我女之語云三年雖坐恒無歎今夜

大キナルナゲキシタマヒツト申セリモシユヱアリ
爲大歎若有由哉亦到此間之
ヤタコヽニキマセル
ユヱハイカニゾトトヒマツリキカレソノオホカミニツブサニソノイロセノ
由奈何爾語其大神備如其兄
ウセニシツリバリヲハタレルサマヲカタリタマヒキコヽヲモテワタノカミコトゴニハタノ
罰失鉤之狀是以海神悉召集
ヒロモノハタノサモノヲヨビアツメテモシコノツリバリヲトレルウヲ
海之大小魚問曰若有取此鉤
アソヤトヒタマフカレモロくノウヲドモヽヲサクコノゴロタニナ
魚乎故諸魚白之頃者赤海鯽
モノミトニノギアリテモノエクハズトウレフナレバカナラズコレ
魚於喉鯁物不得食愁言故必
トリツラムトマヲシキコヽゴタヒノミトヲサグリルカバ
是取於是探赤海鯽魚之喉者
ツリバリアリスナハチトリイデヽスヽレテホヲリノミコトニ
有鉤即取出而清洗奉火遠理
タテマツルトキニソノワタツミノカホカミヲシヘマツリケラク
命之時其綿津見大神誨曰之
コノハリヲソノイロセニタヽハムトキニノリタマハムサマヽハコノハリ
以此鉤給其兄時言狀者此鉤

者。於煩鉤。須須鉤。貧鉤。宇流鉤
トイヒテシリヘデニタマヘ　ハオボチス　ギマギチウルギ
云而。於後手賜。於煩及須須亦
宇流六字以音
然而。其兄作高田者。汝命營下
レカシテソノイロセアゲタヲツクリ　ナガミコトハクボタヲツクリ
田。其兄作下田者。汝命營高田。
タマヘソノイロセクボタヲツクラバナガミコトハアゲタヲツクリタマヘ
爲然者。吾掌水故。三年之間必
レカシタマハバアレミヅヲレバミトセノアヒダカラズ

ソノイロセニヅレクナリナム　モシソレレカレレタマフコトヲウラミ
其兄貧窮。若恨怨其爲然之事
而。攻戰者。出鹽盈珠而溺。若其
テセメナバレホミツタマヲイダレテオボラレモシソレ
愁請者。出鹽乾珠而活。如此令
ウレヒマヲサバレホヒルタマヲイダレテイカシカクシテタレナメ
惚苦云。授鹽盈珠鹽乾珠幷兩
タマヘトマヲシテレホミツタマシホヒルタマアハセテフタツヲサヅケ
箇。即悉召集和邇魚。問曰。今天
ニツリテスナハチコトゴニワニドモヲヨビアツメテトヒタマハクイマアマ

津日高之御子虚空津日高爲
（ツヒダカノミコソラツヒダカウハツ）
將出幸上國誰者幾日送奉而
（クニニイデマサムトスタレハイクカニオクリマツリテカヘリコトマヲサムト）
覆奏故各隨己身之尋長限日
（トヒタマヒキカレオノモ〳〵ミノナガサノマヽニ〳〵ヒヲカギリ）
而白之中一尋和邇白僕者一
（テマヲスナカニヒトヒロワニワレハヒトヒニ）
日送即還來故爾告其一尋和
（オクリマツリテカヘリキナムトマヲスカレソノヒトヒロワニ）
邇然者汝送奉若渡海中時無
（ニシカラバナレオクリマツリテヨモシワタナカヲワタルトキナ）
令惶畏即載其和邇之頸送出
（カシコマセマツリソトノリテスナハチソノワニノクビニノセマツリテオクリダシマツリキ）
故如期一日之内送奉也其和
（カレイヒシガゴトヒトヒノウチニオクリマツリキソノワ）
邇將返之時解所佩之紐小刀
（ニカヘリナムトセシトキニミハカせルヒモガタナヲトカシテ）
著其頸而返故其一尋和邇者
（ソノクビニツケテナモカヘシタマヒケルカレソノヒトヒロワニヲバ）

於今謂佐比持神也。

思其初事とハ、なほ本國を戀しく所念看なり。かの御兄の鈎を責賜ひし事を指が如く聞ゆれども、然にハあらじ。さるハ三年にもならぬ前の事なる故に、初事とハ云べくもあらず。書紀に、仍留住海宮已經三年。彼處雖復安樂、猶有憶郷之情。故時復太息。豊玉姫聞之、謂其父曰、天孫悽然數歎。蓋懷土之憂乎。一書に、是後火々出見尊數有歎息。豊玉姫問曰、天孫豈欲還故郷歟。對曰然。豊玉姫即白父神曰、在此貴客意望欲還上國。などあるを以見べし。○大一歎ハ、意冨伎那流

那宜伎比登都志賜比伎と訓べし。書印本延佳本などに、オホキニナゲキ。ヘ。ス。とよみ、師ハ、イタクナゲキタマヒキと訓き。かくさまに訓むハわろし。若然訓べくハ、一字を加へてこそ書べけれ。此ハ下にも一字を必用あるべきものなり。故くさぐさ思ひ定むる次に、字のまゝに、オホキニヒトタビナゲキと訓べし。さらでも古の雅言にはあらず。那宜伎ハ長息にて、心に思ひ結ぼるゝ事あるときは、長き息の衝るゝを云。さるは哀き事憂しき事ならでは、こそなけれども、凡て心に何事にてもあれ、嬉しき時も、長息あるを、漢國にても歎字などは、何事にもあれ、長間に異なることを云なれども、殊に深く心に結ぼほるゝ物なる故に、其中にも哀き事憂しき事をはら其方にのみ取て、那宜伎とは云なれば、やがて哀み憂ふることにもなれり。万葉十三十六丁に、吾嗟八尺之嗟、又三十二丁、十四丁に、杖不近八尺乃嘆、十四九丁に、

也左可杼利伊伎豆久伊毛乎こと鵠鷏ハ息の長き鳥なる故に八尺鳥と云て
息衝の枕詞なり なぜに 息乃いと長き由ハ八尺
と云 伊伎豆久伊毛 よゑるも長き息を衝て恋
思ふ妹と云 同五六小和何那宜久於伎蘇乃
可是長き息の風なり 於伎 なぜもゑる 大ハ其長
息の声の高く大なる 云 漢文ハ長大
息と常ハ云 思ひ乃深き
まゝに其声と大なるなり 万葉十三十四小此床乃比
師跡鳴尤右嘆鶴鴨 三十四丁小於比曽箭乃曽与等奈流
麻涅奈氣吉都流香毋古今集恋ハ おもき人をと
ふなり山彦の答ふるまで歎きなるかも 長息

の声ハ大きかて物ハ響ひくなり 一ハ一声なり
息長息ハ数ハ云る 中巻倭建命の阿豆麻波夜と
詔ふ 延ハ三歎と云 ちと彼ハ三を三夕ビな
と云ハ如し 漢文ハ一 万葉四三十九丁ハ遍多嘆久嘆ハ
唱三歎なと云 きこと彼延ハ
さて此ハ所念ふ古と浅くて唯一声なるにと非
ず 此時まで御心ハ隠て顕し賜ハぬしを三年ハも
なりて甚久しくハ今ハ得忍び敢へ思ハ
えず出るなり 一声なり云ハ其意見也 次る言
ハ依るハ豊玉毘賣 御長息を聞て驚き賜ふ
なきバ 比賣ハも國思ひ給ふと語と賜ハぬ
るとも 然ともバ御心ハ隠給ふ
書紀ハ 長息ハ数或ハ時なと ハ趣異なり

○恒無歎ハ都涅波那宜加須許登毋那加理斯尓ヲ訓ゝ
ゝし都涅波ハ今まで云ハヲ云意なり故者ヲ云辭を添て訓ル其ハ
中巻倭建命段ニ吾心恒念自虛翔行万葉七三丁ニ常者
曾不念物乎此月ヲ過匿巻惜名香裳ノ如し○今
夜ヲ昨夜ヲ云ふなり此ハ次の父神乃言ニ今旦云ク
ヲ而ヲバ御歎ヲ聞賜ひし明朝の詞なればなり其夜
明て後もなほ今夜ヲ云海ヲ津國風土記夢野鹿事況
記ヲ引処ル明旦牡鹿語其嫡云今夜夢吾背尓雪零於
祁利止見支伊勢物語ニ今夜夢ニ逢ヲ見也給ひしなる
ヲ云ル引ヲバ源氏物語野分巻野分せし明旦の詞ニ

今夜の風ヲ而ル和泉式部物語ニいとゝ零明して明
旦今夜の雨ヲ音ヲ云ク○若有何由ハ毋志那尓能由
恵阿流尓加ヲ訓ゝし若ヲ何ヲを重祢言ふヲ穂ヲ
ら文聞ヲ抒ヲ下文ニ若渡海中時無令惶畏ヲ而ル
も若ヲ無ヲ重ヲ乃古言にヲかゝ格ニも云け爭加
し書紀仁德巻大后御哥に阿ふよくもいとゝ文万葉四
ニ豈不益欲ヲ而ル豈の用格も聞ぬらんいはゞ何ぞの
ごとらの類ヲ引今俗言の格ヲ云意ニ見ヲバ若ヲ云言穂ヲ如く
由而ルヲ何ヲ云言然用ひしヲ
ごヲ雅言にヲ未見ゝ○父大神こゝに至て
大神ヲ云乃ハ火遠理命の御婦翁なり賜ヲ故ニ
やゝ○聟夫ハ御牟古能君ヲ訓し牟古ヲ
のみ訓ハ

輕きゞ如く和名抄ハ尓雅云女子之夫為壻作聟聟和名無古ゝ見え字鏡りハ聟毛古ゝ訓て○今且字諸本並如此あゝゝ決く且を誤るゝ祁佐ゝ訓ゞ志○為大歎こゝりハ一字ゝし之ゝ訓るゝき処ゝり

○若有由哉書紀ハゝ海神乃延彦火く出見尊従容語曰天孫若欲還郷者吾當奉送ゝ訓て○亦到此間之由奈何書紀ハ娶豊玉姫ゝ云て前ハ因問其来意時彦火く出見尊對以情之委曲云ゝ訓り一書ゝゝ同じ信ハ此事ハ初ハ先問賜ふゝ支りのなり然るを此記りハ此ハ至て問給ふゝ御長息の事ゝ聞きるに

就て其所由ハ奈何ゝ為ふゝ所思ゝかゝ其ハ如き

て先初此處ハ来坐ゝ所由ゝ問給ふゝ此處を此間ゝ

書こゝゝ漢文ハ常多く志て万葉ゝりも多し○罰ハ波多礼流ゝ訓ゝし上

りハ乞徴ゝ訓て○海之大小魚ゝ波多能比呂毋能

波多能佐毋能ゝ訓ゞく書紀乃大小之魚をもかく訓ゞきなり そハ上天

宇受賣命段ハ悉追聚鰭廣物鰭狭物以問言ゝ訓るゝ

語の如ゝ書ゝ全同く此記の例同言ゝ言ハ書

ゞ多きこゝ首巻に云るが如し此を意を以て又書紀

書ゝりて訓ゝ上なるに效ハせゝ訓て一書ハ此を依ハち盡召鰭廣鰭狭而問之ゝ志るゝ

もゝ以てゝゝ知ゝ支て加の大小之魚をトハ

ヒロク。ヒキイヲドモ。或ハトホシロクヿ云ク。ハヲ訓ル
ヲ古言をきて何をかやを由ひるぎか聞ゆきぎみるヒ
がよみ。○頃者古の言ふうば。鉤を呑しわしハ三年前
なるほきをやはきバ此ヲ書紀ハ。一書赤女久有口疾ヲ
ひる久ぞ。當ヲて聞えヲる。○赤海鯽魚ヲ多比ヲ訓ほ
し。鯛ヲヲ書紀ヲハ赤女ヲひて赤女鯛魚名也ヲ注
ひり。但此注ヲ後人乃ヲ書にヲ赤女或云赤鯛ヲひ
ヲぞかもひるむヲ。一書ヲ又一書にヲ鯛女又一書ハ赤女ヲひヲて即赤鯛
也ヲ注ヲヲ。さて仲哀卷ハ海鯽魚ヲある和名抄ハ
辨色立成云海鯽魚知沼ヲひるヲを合せて見れバ赤
海鯽魚ハ鯛ヲ俗ヲ決し。知沼ハ鯛の色灰色き物ハ
て黒鯛の類ひり和名抄ハ

知沼ヲ久呂多比ヲハ別ヲ色ヲ遠かるヲ物なヲヲ。さて
ひの鯛ヲ知沼ヲ形全く同く色赤き故ハ赤海鯽
魚ヲ書ヲ形ヲ。擂を白擣ヲ書るるひヲ又仲哀卷
ヲるハ色の赤き黒きを一ハて海鯽魚を鯛ハあて
ヲるヲの形ヲ。凡て古書ハ物乃漢名を書ハヲ其人
の心くにて右ヲ如く少し違ひの違あり。彼此をよく
考合せて定むヲしよくせ多比ヲ和名抄ハ崔禹錫
ぞハまぬほきりのぞ。
食經云鯛味甘冷無毒貌似鯽而紅鰭者也和名太比ヲ
見也字鏡ハ鯛太比ヲひヲ。師ハ此の赤海鯽魚ヲ
書紀ハ依てアカメヲ訓
ヲもヲ其もはるヲなきぞ。此記乃例若ひるヲある
らむりハ直ハ赤女を書ほきひヲ。さて又書紀の赤女
を赤鯛也ヲあるり依て或説ハ鯛の中ハ一種殊色赤
き形ヲ俗ヲるヲ。ヲし後世にこそさもひるぞ。上代
りハさバうヲ細ハ分て名ヲ
ハ赤鯛ヲひるも即よの形ヲ乃鯛ハて黒鯛の類も乃
ヲ對ヲて赤字ハ添よるヲ然るにヲ仲哀
卷ハ海鯽魚を多比ヲ訓るハ此乃赤海鯽魚を

もアカダヒを訓てからの殊に赤き一種を心得るも非なり又アカチを訓るも非なり さてこれ多比の下に那毋てふ辞を讀添るし語の勢必然るなり

○喉ハ能美斗を訓なし 呑門の義なり 和名抄に喉ハ和名乃無止 こハ美を音便ふん 万葉五に能杼與比を云言なり 喉声に啼美を省くなり かくさめう省き云下ハ多く濁る 例なり 今世も能度を云 ○鯁ハ能義阿理を訓なり 和名抄に唐韻云鯁魚刺在喉也 和名乃木を加 又字書に骨不下咽也を注す

○愁言故の三字に宇礼布を訓なし 身ハ憂を人に告ふを宇礼布を云故に愁言二字を然訓 さて礼婆を云故に愁字の意ハあり ○是を ハ赤海鯽魚に指て云なり 許礼賀を云意なき

を云ハ雅言に非ず 古文に此例多し 漢文の是字の格を ハ異なり 書紀云海神乃集大小之魚逼問之僉曰不識唯赤女比有口疾而不来固召之探其口者果得失鉤一書に海神於是總集海魚覓問其鉤有一魚對曰赤女久有口疾疑是之呑乎故即召赤女云く 一書に時海神便起憐心盡召鰭廣鰭狭而問之皆曰不知但赤女有口疾不来 亦云口女有口疾云く 於是海神制曰 你口女従今以往不得呑餌 又不得預天孫之饌 即以口女魚所以不進御者此其縁也 此一書上に赤女を云て下に口女を云るハいかに 初に赤女を云るハ口女を誤るか 亦云口女云の注も心得ず とを一本に 亦云 ○古事記傳十七

女ヲ赤女即赤鯛也口女即鯔魚也問之時口女自口出鉤以奉焉○清洗ハ須麻志豆ヲ訓ゼし洗ひ清むるを須麻須ヲ云ヒ○給其兄ヒ之火遠理命ヲ尊崇み又火照命ヲ賤ミ悪み給て御兄なるも給ふヲ云ふなヒ○淤煩鉤書紀一書小因奉教之曰以此與汝兄時乃可称曰大鉤踉蹌鉤貧鉤癡騃鉤言訖則可以後手授賜ヲ所ふる相照して考ふ小淤煩鉤ハ大鉤小當れヒ大ヲ借字ヲ此大字ヲ意ヲ以て説ハあ説ヲと云ヒ餘の三鉤ヲ皆借字に非ヲ此煩ハ濁音大のみヲ借字ヲ云ヒ意明らかなれども此淤煩ハ煩ハ清ても云ヒ此言ハ万葉巻く小鬱悒ヲ云ふ事多かる是なり四の巻小朝居雲乃鬱

帝国図書館蔵

ものヒ明らかなるべし意ヲ訓ヲ意ヲ訓ヲ是ヲ省ふヒとらヒ此假字にも意保く斯久ふヲ保ふハ多く清音ハ字ヲ用ひふ五巻十一巻十四巻十六巻然る小又十七小ハ於煩保之久ヲ濁音小書ヒ清ても濁ヒても云る言ヲ訓ヲ又おヲ訓ふなし此ハ常ふハ煩ヲ濁るお万葉ハ巻十書ヒおヲ訓ふヲ保東無ヲ清音ハ保を書ヒ又かの鬱悒ヲイフカシヒヲ訓ふ処ふる明らかなるも明らかなるもイフセシヒヲ訓ふ処ふる

ふ淤煩ヲ伊ヲ通ふヲ於伎ヲ伊伎ヲの如し之て此いふかしいふせしヒ布ふ常に濁ヒも万葉小ヲ多く清音小書ヒ又おふろうおふふろうおふふろうあふそうおふかふふもふ

委曲なるぬを云ハ本ハ明らうなるげる意うて同じ。
淤冨ゝのみも云ふ。そて此の淤煩ハ愁思ふ丈の有て心乃晴せぬ意なり。心を晴らしるを明らむゝ方葉ゝかゝぶ云ゝ。ば晴をぬを明らかなるゝぶ万葉二十日並皇子命の薨坐て舎人等の慟傷哥中に旦日照嶋乃御門尓鬱悒人音毛不為者真浦悲毛四三十三丁ゝ今更妹尓将相八跡念可聞幾許吾胸鬱悒将有五二十六丁ゝ國遠伎路乃長手遠意保ゝ斯久許布夜須疑南己寺騰比母奈久許布夜ハ。そもらゝ鬱悒の如し。（）須ゝ鉤師の冠辞考ふせをよゝ盧八燎須酒師競云ゝ。ゝ。ゝきそひゝハ壯士ゝを乃心の進みゝ

ろぎて身をもゝゝ競ふを云古事記ゝ須ゝ鉤ゝ師ゝ
を神代紀ゝ踉蹌鉤ゝ書ゝ是もゝゝ意なり又
古事記ゝ美人驚而立走伊須ゝ岐伎ゝ師ゝ毛立走
ゝろぎゝろぎゝ後の書ゝゝゝ云ゝ
是ゝ傳八のゝ引ゝ師説ゝ佐備ゝ須佐備ゝ
四葉ゝ
ゝ此ゝよゝ當れ須佐ゝ須ゝゝ同くてゝの須佐備
ゝ進み荒ぶゝゝゝ須ゝゝ進みゝゝろぎて
荒ぶゝ意ゝ書紀ゝ踉蹌鉤此云須ゝ能美賦ゝ師ゝ
王篇ゝ踉蹌欲行貌ゝ注し又躁急行ゝ注し又字書
ゝ踉高蹈也ゝ踉躍貌ゝ注せゝ

みなゝ意ゝ近き字なり。又字鏡ゝ猖獗須くの乃弥
字ハ獗字ハ獗なるべし。さて須
須能美の能美ハ其言を活用に辞ゝて音をおゝ此記
云那比の類なるべし。
ゝ能美てゝ辞なきハ詛言なる故に言ハ調を為て
淤煩須く麻治宇流ゝ皆二音に齊ゝ物なり。書紀一書
ゝ貧窮之本飢饉之始困苦之根ゝ為ゝ
本始根ゝ換て言ハ文なるべし。此四皆本
ハ用言なるべし。此ゝてハ躰言なきなり。其由ハ凡下ゝ云
て用ゝも躰ゝも云言ハ用の時ゝ下ゝ活く辞を加ゝ
躰の時ハ其を除くこゝ多く忘て用言に渡ゝ渡ゝ海ゝ
ゝ云用言ゝハ歌ひ歌ふゝ云ゝ躰言ゝハ海
躰言に歌ゝ云なり。加の意保く志久なり
ゝ用言なる故此ゝハ躰言に淤煩ゝ以ひ須く牟須く
呂久なゝハ用言なるゝ。此ゝ躰言に須くゝ云て須又
須能美ゝ云ハ用言なる故下なる活く辞をそのまゝ
ゝて渡る處を指て躰言にゝ渡て渡ゝ云用言をそのまゝ
そのまゝゝて歌ふ物をゝ云ゝ歌ひゝ云用言を
なゝ云ゝ如し此例ゝ常乃
なゝ。○貧鉤ハ麻治知ゝ訓なし書紀ゝ如此あて
昔ゝて然訓来れて麻治ハ麻豆志の切なり。
と麻豆志ゝ本ハ麻治志ゝて
紀ゝ癡駭鉤此云于摟該臓ゝ云て此字ゝ意なり。駭ゝ
ゝ癡也ゝ又景行巻ゝ失意ゝ云なり。敏達巻ゝ於
注ゝ。
名ゝ同言なり。俗言ゝ云人
の寒かゝぶる状ぬるゝ
塗物をゝるとゝ云なりて知ばし。又俗ゝ鈍きゝ云ゝ

俗一字云も字流乃意なり。さて書紀ハ于樓該なるに此記ハ該の無きハ上の須くの例乃如く皆二音に齊ふるなり。さて右ハ四の鉤ハ皆書紀の訓注ハ臓字に依て訓ぶ。臓ハ女利反ハて知の濁音の假字なり。但治乃濁音を重ねるばなり。古言に濁音ハ二ツ重ねるを清音ハ訓ぶし。上の類ハ二ツ重ねるを清音ハ訓ぶし。こゝもハ二ツの考へ乃通一ツなり。佐知乃知を同くして取なり。海佐知山佐知の佐知ハ幸取の意なるを上ハ云るがゆゑに。其由ハ此失ひ賜ひし鉤鉤なるを海佐知毘古ハ幸取なるを今ハ詛ひて其幸ハ反乃不幸事なると取具を云意にて幸取も幸を取具を云意なるべし。上ハ委云て。悒取跟蹻取貧取癡騃取なり。此四ツハ不幸事なるもハ皆取

を云をきハ上の言みな躰言なり。さて取の意なるハ鉤字ハ書ふるいかゝを云ふ其取具即鉤なるて備ハ云ハ其取鉤を云ふなるをバ。なるを。かの佐知も備ハ云ハ幸取引幸取鉤を云ふなるハ同じ。二ツハ鉤字ハ。なを鉤なりなるを後人さかしらハ鉤乃誤を忘て改なるの。書紀今本ハ此二字ハ。ゆゑひて誤を改なるを。又書紀ハ数ひて此記も同なるを。さるを彼本ハ上なる真福寺本にも此四の鉤ハ鉤なるを。みな鉤を作なるをバ。據なるを。さて鉤を知を訓を都理の約なるを。此種々ハ不幸事を鉤る具を云意なり。物を鉤る具を指て。某鉤を云も取具を取を云を同格なるを。かくて凡て意ハ上乃考へを同じ。右二ツのうち見む人心乃向ハ

む方を取るべし。但し幸取を反さむと云ふなれば。なほ取らせむ方や優るならむ。此知を。ぢ鉤の古名と心得。或ゝ都理婆理を切むれバ知なると云。此段なる鉤字をバ。なべてみな知と訓るハ。精しからぬひがことなり。○後手ハ。上黄泉段ふ見ゆ。傳六の卅二葉。此処なる是も詛態なり。書紀一書に。以後手投棄與之。勿以向與もあり。こゝをかの逆手を一ツふ心得るハ非なり。逆手ハ後手とハ異なり。書紀云。因誨之曰。以此鉤與汝兄時。則陰呼此鉤曰貧鉤。然後與之。一書ふ因教之曰。以鉤與汝兄時。則可詛言貧窮之本。飢饉之始。困苦之根。而後與之。一書ふ。貧鉤滅鉤落薄鉤。一書に。因奉教之曰。以此與汝兄時。乃可称曰大鉤踉蹡鉤貧鉤癡騃鉤。言訖則可以

後手授賜。一書に因教之曰。還兄鉤時。天孫則當言汝生子八十連屬之裏貧鉤狹〻貧鉤。言訖。三下唾與之。○然而ハ。然為而なり。此言此処ふてハ。上の事を下へ係る言なるべし。○高田ハ阿宜多と訓べし。書紀ふ然訓り。字ハまゝふタ。カ。タと訓むも。あしからじ。万葉十二丁十七ふも。水多上ホ種蒔とよめり。田中道麻呂云。尾張近江美濃國〻ふ然云地名も多し。されバなぞふて。今も田の中此水乃おらぬ處を。あぞと云り。地高くてよく燥く田なるぞ。○下田ハ。書紀ふ湾田とあるふ依て。久頬多と訓べし。窪み卑くて。水多き田なり。○掌水故ハ。美豆袁斯礼婆と訓べし。師ハ。ミ。ヅ。ヲ。シ。レ。ル。カ。ラ。ニ。と訓まき。故をカラニと訓まくるを。よろし。此ハ然を云るきふ非ず。掌をシ。レ。パと訓き。

国立公文書館
National Archives of Japan

ふるいを宜し。今も其ふ依まり。此字常にそツかシル。サドルを訓ぞと。此ハ然訓てハ。古言ふ乃ふ。斯流ハ。天下を知る國を知るぞ乃知ふて。水を保有ち掌て。心ふ任ぜを云ふ。はきばと兄若高田を佃らバ。吾旱ちて水ふ有らせじ。若又下田佃らバ。雨を多くぬらきて。妨ぐむぞ。万葉十八三十二丁ふ安米布良受日能可在奈礼波宇恵之田毛麻吉之波多氣毛安佐其登尓之保美可礼由苦云ゝ安之比奇能夜麻能多乎理尓許能見由流安麻能之良久母和多都美能於伎都美夜敝尓多知和多里等能具毛利安比豆安米母多麻波祢ゝ海神水を掌賜ふ故り。雨を乞ふ。○三年之間

ハ。漸ふ貧窮くなる間。三年ぞる況云。然る況間の下ふ尓てふ辞を添て。アヒダニ。或ハホドニ。ぞ訓。きハ。三年を経て後ふ。貧くなるふ如くふ聞ゑて。意違ふ。尓ぞハよむばかゝ。

文中巻明宮段末ふ其兄八年之間干萎病枯ぞ。ふるも同じ。○貧窮ハ。麻豆志久那理那年ぞ訓ばし。下文に自尓以後稍俞貧ぞ。ふ乃是なる。師ハ。ヂ。タ。シ。ナ。ミ。ナム。ぞ訓きれぞ。言ぞ動おりぞ。ふうふぞや聞也。ふしぞむ古言ふて。窮字ハ近ぞきぞと。此ぞ貧をむぞや云て。窮字ハ輕し故。下文ふ。くぐ貧ぞのみあふ。又書紀一書ふ貧窮之本ぞふるも。貧を主ぞきり。又書紀ふ繿縷ぞふる。此言に。ふれぞや。ふ況ぞ云言ハ。形狀ふ況高田を佃きバきて云言ふきば。貧窮字ふも當らず。早し。下田ふ佃きバ雨多くて。毎も稔を得ずして。貧くなるぞ年ぞふ。○恨怨其の其字ハ。若ぞ下ふあ乃意

ふて火照命を指て云言なり次ふ若其愁請者をなる
其を同じ○爲然之事をハ初乃詛事及田佃を稔得ず
貧くなる神をなぐ皆都て云なり其中ふ田佃て稔
得ぬをぐハ海神の所為なるをぐと弟命の御為ふ為給
ふなるをバ其をも直ふ弟命より為給ふ事をもて かくも
云なり○塩盈珠塩乾珠ハ志本美知陀麻志本比陀麻を訓ぐ志本美都多麻志本比流多
麻を訓ぐし志本比流を思ふぐなりハ非ず又乾ハ書紀景
行巻ふ賦を訓注あるをバ比流を云ハ急居を蒐岐于
行ぐなる同格ふて比布布流を云むを今ハ耳遠けを
をぐ布流を訓ぐ常の如く比流を訓ぐ
バ姑く擧常の如く比流を訓ぐ
切浪比礼振風比礼切風比礼切風比礼を云物見也と此類を

中巻末に振浪比礼

是書紀仲哀巻ふ皇后泊豊浦津是日皇后得如意珠於
海中を云る神をなり ことる土佐國風土記ふ吾川郡
玉嶋或説云神功皇后巡國之時御船泊之皇后下嶋休
息磯際得一白石圓如鷄卵皇后安于御掌光明四出皇
后大喜詔在右曰是海神所賜白真珠也故以為嶋名
なる一ッ事なるを國の異なるを傳乃異なるを
し書紀ふ如意珠を書れるふこを心得ずいうふ
を訓ぐき方なるそのかみまを文字なき世に如意なるを云
名なるぐるをなるぬを強ふ漢をまを縁び給ふなり
ふかいふ名なるをまを物し給ふ結ふを後世より人をぐはし
かりてかく如意を書れしる意ふバ珠乃美きを称
るのみをの又を此姫尊新羅を征るを時ふ彼國
中ふて潮の押上を夏なる其ハ即此珠の德なり
故ふ其意を以て書れるうれをかの新羅の國中
を潮の上を事此珠乃德なりを云こをハ此記ふも
彼紀を見えをれバ此なり
功皇后干珠滿珠を龍宮より得賜ひて三韓をまを
をるを由云ふ古き傳ふ事をかの書紀の如意
珠を新羅乃國中を潮の上を事を引合をて
なるなり云ふ是もなるしなり次又其二ッの珠後ふ肥

前國佐嘉郡河上宮ニ云ふ納まれるし云ふかくて
書紀釋ふ元暦之比宇佐宮監行之時本宮注文滿瓊涸
瓊二種在當宮之由注進之云く二種瓊已在當宮神功
皇后征伐之韓之時就新羅海潮滿宮庭思之定令持此
瓊御欲然而無憾所見ニ云ふ此ふもおがおうおきこと
ありて神功皇后の珠ハ新ふ海中ニ得賜ふ事なるを
ばかの神代乃瓊ニハ別なるふ神代の瓊の宇佐宮ふ
在ると何の由緣ふ心得がたし故思ふふ宇佐宮に在
ニ云ハ神功皇后の得給ふ事ふ珠ニて かの肥前國河
上宮ふ納まる珠ぞ神代のかりもの也此ニを彼ニを一ツ
ふ心得誤ふて右ふまぎれも如ふにやうう爭ふ河
上宮ニ云ると神名式に佐嘉郡與止日女神社ニ云ふ是
ふ云ふ云ふ或書ふ豊玉姫を祭ふ云ると由ふて さ
てかの神功皇后の得賜ひし珠ふ若実ふ干珠滿珠ふ
て新羅の國中ふ潮乃上ニ出ると其玉乃故ふ海神
の龍ふて塩盈珠塩乾珠ふ今火遠理命ふ授奉れるの
みふもふ文ふ幾箇
をあふ物ふ聞ふ
可味能美許等乃美久之宜尓多久波比於伎豆伊都久
万葉十九二十九丁ふ和多都民能

○古事記傳十七

等布多麻尓末ノ里豆云ふ云ふ文ふ○若其其字曾礼
ニ訓ふ此下ふ兄字の脱ると思ふ然ふハ非ず火照命を指て云言
なり漢文ふ其ニ云ふ下文ふ其愁請者ニ訓ふ○令惚
若ハ多斯那米賜幣ニ訓ふし書紀ふ厄字又辛苦困厄
動勞ふ訓ふ此言多志那美ニいふハ自ふ
ふ城ふ他ふ多志那米ニ云ふハ米ハ麻
ふふ上ふ令字ふ是ふ惚字上ふ出
傳六の廿六葉○授塩盈珠云ふ此言ハ前ふ先云ふ
云は文ふて出塩盈珠云ふ云ふ先云て後ふ此ふかく云
ふも文の一格なり書紀云復授潮滿瓊及潮涸瓊而誨
之曰潮滿瓊者則潮忽滿以此沒溺汝兄若兄悔而祈

者還漬潮涸瓊則潮自涸以此救如此逼惱則汝兄自伏こゝを瓊を漬ゝかゝ所ハ此記ふ出ゝわ所ゝ用法の傳へ異ゝるなり又一書ふ以思則潮溢之瓊思則潮涸之瓊副其鉤而奉進之曰云ゝ又一書ふ復進潮滿瓊潮涸瓊二種宝物仍教用瓊之法又教曰兄作高田者汝可作湾田兄作湾田者汝可作高田ゝあ

又一書にゝ又汝兄渉海時吾必起迅風洪濤令其没溺辛苦矣一書ふハ又兄入海鈎時天孫宜在海濱以作風招如此則吾起瀛風辺風以奔波溺惱ゝ云海ゝの

瓊の事ハなし○和迩魚の魚字讀ゝかゝ次上ふ

ふもしゝバ和迩ゝのみあふ魚字を加ゝ下ゝ此りのみ魚字を加ゝ書ゝ

ゝ漢名ふ殺ひてゝゝ漢名ふハ鰐ゝと鰐魚ゝ

もいひ又鯉を鯉魚鮒を鮒魚ゝゝ云例ゝゝ○上國ハ書紀ふ上國此云羽播豆矩伊ゝ云ゝ海神宮ハ海底ふゝて此御國ハ上ゝゝ

ふ故ゝ如此云ゝゝ或人漢文ふいゝゝ上國のこゝゝ

ふゝこゝゝゝ鎮火祭詞ふ吾名妖能命波上津國乎所知食倍志吾波下津國乎所知年止申豆こハ豫美國ふて申賜ふ御言ゝゝゝ故ふ此瑞國を上國ゝ詔ゝて豫美も根國底國ゝ云て下方に在ゝゝゝ

少ゝくゝて意詳ふ聞えゝゝ古文ゝゝゝゝゝ然ゝを誰者ゝ云ゝゝゝ

聞ゝ紀ふ思ふて異ゝゝに訓るハ非ゝ○覆奏中卷ふゝ多礼波ゝ云ゝゝ意明らゝゝゝ

も如此書て覆ゝゝゝゝ書紀ふを復命を服命ゝかゝ

万葉ふ都を堵ゝ書ふるゝゝ往ゝゝゝみを音ゝ通ふ

まゝかゝらぬ意は字をも書法こゝに古書乃例なり。漢籍
かも覆奏ゝ云ゝ作る其ハ異意なり又漢ハ覆
を復ゝ作る例なれども復を覆ゝ作ることなし。
○己身二字を美ゝ訓だし。己字を別ハ上か各ゝ訓ばこゝ
ゝ即己を己をかもバかゝ。○尋長二字を那賀佐ゝ訓
だし。ヒロ。ヒロ。ノ。ナ。が。上の八俣遠呂智かも其長
サ。ゝを訓ゞ字れば。ヒロ。ヒロ。ノ。ゝ之を讀附るハあゝ
ゝかゝ。○一尋和迩。ヒロワニ。下文の八尋和迩も志ゝかり。
書紀一書か塩筒老翁計曰。海神所乗駿馬者。八尋鰐也。
是竪其鰭背而在橋之小戸。吾當與彼者共策。乃将火折。
尊共往而見之。是時鰐魚策之曰。吾者八日以後方致天
孫於海宮。唯吾王駿馬一尋鰐魚是當一日之内必奉致

焉。故今我帰而使彼出来。宜乗彼入海云ゝ。言訖即入海
去矣。故天孫隨鰐魚所言。留居相待。已八日矣。久之方有
一尋鰐来。因乗而入海ゝかゝ。異かゝ。傳ゝ。
一尋和迩か乗せかゝ海神宮ゝ還坐度の事かゝ。さ
ゝ此一書の傳ハ其宮幸行ゝかゝ事ゝ。
て是か依ゝ八尋和迩ハ八日を經て行路を一尋和迩
ゝ一日か行ゝハ纂疏か短者身軽而行駃長者身重
而行遲ゝかゝ。是故かゝ。よのかゝ例を以て思ハバ。
かきゞ速きハ鰐ハ実か然る隨己身之尋長限日而白
物ゝ。かゝ尋ぬばし。
ゝかゝ長き短きに隨て速き遲きをゝ来かゝ。
又一書ゝ乗火ゝ出見尊於大鰐以送致本郷ゝかゝ

を小きを大なるを異なる傳なり又一書に召集鰐魚
問之曰天神之孫今當還去你等幾日之内將作以奉致
時諸鰐魚各隨其長短定其日數中有一尋鰐自言一日
之内則當致焉故即遣一尋鰐以奉送焉作字ハ供の誤る
按此記を同じ○若渡海中時万葉一二十に對馬乃渡渡中ニ云々ハ若を惶畏ハ係る言なり海中を渡るハ
りを定まれる事なきバ若を云ふなか非ず○無令惶畏ハ那訶志許麻世
麻都理曽を師乃訓もなに從ふなし こハ凡て海中
を行ふをハ可畏き物なる故に其心して懼賜ハぬさ
なる物をよを戒を給ふる將鰐ハ猛くおそろしき物

なる故にてもいまを手ゐ○載其和迩之頸背にそを乗
奉るなを支物なるに頸にも乗奉る由を鰐ハ書紀
に竪其鰭背なるなるに如く背にハ鰭の有て乗がる記
にもあるも○如期ハ伊比斯賀碁登を訓なし○紐小
刀上に出るを傳十六の此を頸に着て還し賜ふを送
致奉る功を賞賜ひて物賜ぶなし○佐比持神
書紀にハ紐小刀に事なるに此神のをを此延りハ
無くも神武卷に進到于紀伊國云々海中卒遇暴風
皇舟漂蕩時稲飯命乃歎曰嗟乎吾祖則天神母則海神
如何厄我於陸復厄我於海乎言訖乃拔劒入海化為鋤

持神とのるハ甚異なる傳なり此記に於今謂ふ所以見きバ後まで海中に佐比持神と云神の有ける其神の初乃由縁の傳の此と彼とに異なるなり此神は二ッあるハいかゝ也名義もかの被賜きる紐小刀ぞ有持る由なり佐比も書紀推古巻大御哥に多智奈羅磨句礼能摩差比られ見の真佐比を佐ゞれ大刀なりにより給又神代巻に蛇韓鋤之劔と云ひ見に私記に呉真鋤良劔之名也と云ふ呉真鋤を韓鋤と心ばへ似キと訓るハ非なり名なり韓鋤をカラスキと訓るハ非なり佐比に書紀に鋤字を書れしなるいうなる義なり心得がゝし此事なれ次に云ひ又此佐比の比を濁りて讀もるゝ此に書紀推古巻に蜻清音の比字を書きバなり濁る法き據ハ無し鏞と一ッ意に心得るハ妄なり中巻倭建命の御哥に木以造る詐刀なりを佐味那志尓阿波礼とよみ賜ふ佐味も佐比と通ひて同きゞ如聞えて師の冠辞考に然るゝ見も和名抄に越中国新川郡佐味佐美と云ふこれ郡を此比と美と通ふ例なり共に大ゝハ聞ゆきなれども右の御哥の佐味も直に刀なりのみ見てハ穂なり次冠辞考に木刀ハ身なりき謂ふて佐味那志と云ふ古へも云ふなり刀に身てふこと古へも云ふなり此の佐比持神の云ふ沢も引きるなり今思ふに佐味那志も身無しふて聞えるなり佐比持ハ身持と云て穂なる故かの佐味と云ハ別なるかやうなる事かくて佐比も物を截断貌を云ふ言ふて須加比の切なりふて乃須加流劔布都御霊なり云類の劔の称かやうなり上なる都牟刈之大刀なり延傳九の巻を考合へ見し或説に神代紀に竹刀なりきバ佐比

ハ小刀ニテ云ヘルガ右の推古紀の御哥ニ大刀ニ摩
差比ヤ行キバ小刀のみの称ニ非ズ且ツ小をバ佐ヒ
比ヤ云ヘレ佐ヤ云ルこヤ古言ニ例なきをやさて須加
比の切ヤ云ルかやかぶしきニ切きて思フバ書紀
ニ鋤字沈書ニハ古ヘ須伎を延て須加比ヤも云ルゲ此
佐比の本言は須加比ヤ同き故ニ通はし借ルなるかや
ム和名抄農耕具ニ鎛鋤属也漢語抄云佐
比都惠ヤ行キバ鋤を佐比ヤも云しかや。續紀十
ニ紀朝臣佐比物類聚國史九十九ニ玉作佐比毛知ニ
ヤ人名ニも見ユ。天武紀ニ小子部連鉏鉤ヤ小
子部連鉏鉤ハ同人ニて
鉤鉏のうちニ一ツハ誤字ニ
ヤ訓るこヤ心得ベ神代紀の鉤の謬訓ニ
こて又齊明紀ニ贈振鉏此ヲ云伊浮梨幾陛ヤ行
る此ハ佐比を佐閇ヤも通ハし云ヘ見ユ。
コヽヲモテツブサニワタノカミノヲシヘレコトノゴトクシテカノツリバリヲアタヘタヘヒキ

是以備如海神之教言。與其鉤。

カレソレヨリノチイヨヽヅシクチリテサラニアラキコロヲオコシテ

故自爾以後稍愈貧。更起荒心。

セメクセメムトスルトキハシレホミツタマヲイダシテオホ

迫來將攻之時。出鹽盈珠而令

ラシソレウレヒマヲセバシレホヒルタマヲイダシテスクヒカク

溺。其愁請者。出鹽乾珠而救。如

ンテタシナメタマフトキニノミマヲサクアハイマ

此令惚苦之時。誓首白。僕者自

ヨリユクサキナガミコトノヨルヒルノマモリビトトナリ

今以後。爲汝命之晝夜守護人

而仕奉。故至今。其溺時之種種之態。不絶仕奉也。

故自尓。此ノ三字。上なる少名毘古那ノ神ノ段にもあり。傳十二の〇以後の下に其兄が云詐が如くすべし。さて與其ノ葉鈎が云。次に高田を營れバ云々。下田を營れバ云々の事も有るべきに。なきハ。其を初に教奉し言に。既に備れ出たる故に。此にハ畧けるなり。かゝる例。記中におほかり。〇稍兪ハ。伊余ゝと訓べし。兪字は愈と通ふ。稍ハ。常にも夜ゝとよめり。夜ゝハ。伊夜ゝさの伊の省かり

なるなれバ。即チ伊余ゝの本同言なり。故レ今ハ二字を合せて。伊余ゝと訓べし。さて此ノ言。後ノ世にハ。伊余ゝと云なれど。古へは伊余ゝ。万葉五下四に。伊余ゝ麻須万須。廿十一に。伊与餘ゝがなどあり。さて此ハ事の漸に甚しくなりゆくを云言にて。今ノ世に本より然る事の。甚しきのみゆくハ非ず。本より然る事を云が如くなるも。抑も然る事なるにても云ハ。稍兪貧ハ。三年之間。漸に貧くなりゆくを云なり。俗に次第ゝゝに貧くなるをにもいて。然貧くなりゆくハ。彼ノ淤煩鈎貧鈎が詛言に非ず。云意なり。本より貧しからしの詛言の驗に當れるなり。貧くなるバ。愁思ふ事ありて。心晴やらず。然るバ貧くなるに。淤煩ふ驗を（）更に先に失なわしし鈎を。強に責徵るをも兼たるなり。〇起荒心。こは彼ノ須ゝ鈎宇流鈎を今又更になり。

ゝ訛ハ二の詛言乃驗ヲ當れ是弟命の御威德ヲ勝れたるかく須く美荒ゝ
ゝ得悟らて
ゝ疑心
ゝ流て驗ゝ兼ゝ
○迫来此ヲて語を
絶ゑし此ゝ大凡を先云ハ
ゝ此次の言ヲ其迫来て
の狀ゝ子細ヲ云是
○將攻之時云ゝ愁請者云ゝ此ゝ
唯一度此事ヲゝ
ゝ幾度も如此有ゝ聞ヲ乱文
のゝゝ書紀一書に時彦火ゝ出見尊受彼瓊鉤帰
来本宮一依海神之教先以其鉤與兄兄怒不受故弟出
潮溢瓊則潮大溢而兄自没溺困請之曰吾當事汝為奴
僕願垂救活旁出潮涸瓊則潮自涸而兄還平復已而兄
改前言曰吾是汝兄如何為人兄而事弟耶弟時出潮溢

瓊兄見之走登高山則潮亦没山兄縁高樹則潮亦没樹
兄既窮途無所逃去ゝあるゝ是正ゝ一度ヲ非是ゝ趣
ゝ是又一書ヲ弟時出潮滿瓊即兄拳手溺困還出潮涸
瓊則休而平復其後火酢芹命日以纒縷而憂之○惚苦
惚字諸本ヲ揔或ハ惣ゝ作是今ハ上文ゝ依て改
免ル○誓首白ハ諸本首字を脱ゝ今ハ能美麻袁佐
真福寺本延佳本ヲ依る
致ゝ訓ゑし書紀崇神卷ヲ彦國葺射埴安彦中胸而殺
焉其軍衆云ゝ知不得免叩頭曰云ゝ叩頭此云迺務景
行卷ヲ日本武尊抽裀中之劔刺川上梟帥之胸未及之
死川上梟帥叩頭曰云ゝ神功卷ヲ新羅王降於王船之

前因以叩頭曰云々。叩頭事はなるを皆同じ。又誓首を叩頭と字義此記朝倉宮段に志幾之大縣主懼畏も大かゝと同じ。誓首白云々。故献能美之御幣物云々。こゝも事はなるを同くこゝて。誓首の表物を。能美之御幣物を云ふて。能美を訓ぶきこゝを知ぶし。延佳本にも。ヲガミを訓師こゝハ祝詞に頸根衝拔を云ふこゝを。多くなるに依らこゝ。こゝに訓誓首はこゝ字義こゝハ鄙也。此処こゝ。こゝに字の如く。首を地に付こゝ非也。能年ハ。こゝ物を伏きて。拜むのみを云ふ。能年を伏従て。罪を赦し給ふを。請願申ふこゝ。俗言に。真平なやこゝを。故書紀こゝハ此こゝ。自伏罪曰を書れこゝ。又万葉哥に。神に物を祈ふを。許比能年を多くよまるも。奈年を也。

能を奈を也ハ。通ふ音なり。本ハ同意なり。書紀崇神巻に。請罪神祇を。こゝに。此こゝを二方伏罪方を祈ふ方を。に。こゝれ。○晝夜を余流比流を訓ぶし。續紀世一宣命に。且夕夜日不云ぬあり。古語皆如此し。祝詞に。夜乃守日乃守を云ふこゝ。常に多く見也。○守護人。書紀。欽明巻に。為守護。こゝて書紀一書に云々。於是兄知弟有神德。遂以伏事其弟。是以火酢芹命苗裔諸隼人等。至今不離天皇宮墻之傍。代吠狗而奉事者也。世人不債失針。此其縁也。こゝに。代吠狗を云ふ。即守護人。こゝ。不離宮墻之傍。こゝ。晝夜を云ふに當れ。職員令に。衛門府。督一人。掌諸門禁衛云々。及隼人門籍門牓事。抑こゝの火

照命ハ隼人の祖ハ坐て其事傳十此守護の事後まで六ハ出
隼人の職掌ハ隼人司式ハ元日即位及蕃客入朝等
儀ニ官人三人史生二人率テ大衣二人番上隼人二十人今
来隼人二十人白丁隼人一百三十二人分テ陣ス應天門外
之左右ニ云々今来隼人發スル吠声三節蕃客入朝ニハ不レ在レ吠限ニ云々大衣
及ヒ番上隼人云々自餘隼人皆云々執レリ楯槍ホコヲ並ニ坐ス胡床ニまゝ
ゝ九踐祚大嘗日分テ陣ス應天門内左右ニ其群官初メテ入レ發スル吠
云々まゝ九遠ク從テ駕ニ行者官人二人史生二人率テ大衣一
人番上隼人四人及ヒ今来隼人十人供ニ奉其駕ニ經國界及ヒ
山川道路之曲ニ今来隼人為ス吠まゝ行幸經宿者隼人發ス

吠ヲ但近幸ニ不レ吠まゝ九今来隼人令ム大衣習ハ吠ヲ左發レ本声ヲ
右發ス末声ヲ惣テ大声十遍小声一遍訖テ一人更ニ發スル細声ヲ二遍
まゝ九威儀ニ所レ須ル横刀一百九十口楯一百八十枚云々以ニ赤
白土墨ヲ畫ニ鉤形ヲ木槍一百八十竿胡床一百八十脚云々なゝ隼
人乃事ハ彩ニ委々見ル也そゝ隼人ハ大隅薩摩國
志ニ出て朝廷ニ召レて仕奉まるが永く留まるて京近き
國の人ニなれるも子孫まで彩ニ隼人ニ称て其職ハ
仕奉れるまゝ彩ニ隼人式ハ五畿内及ヒ近江丹波紀伊等
國隼人ニ彩ニ云なり和名抄ハ山城国綴喜郡ハ大住郷あるも
大隅国の隼人乃留住まゝ彩ニ名彩ニ中原康富記ハ
隼人司領山城国大住荘ニ見え又康正元年十月十七
日是日當國大住荘内隼人司領名主南未知実名来申
予ニ對面申云大住内隼人領大嘗會田ト申テ田地一町
二反有大嘗會時參洛於官廳ニ奏風俗舞人役是也なゝ

見えたり。さて大衣等云ふも右の近き國々より隼人の中
かて二人を擇び補したるものなり。隼人式に九大衣、
者擇譜第内置左右各一人大隅為左阿多為右教道隼
人云々等見ゆ。大隅阿多等ハ其國の人を云ふハ非ず。
先祖の出たる地を以て近國なれども大隅隼人阿多
隼人等別ち云ふなり。或人大衣を大隅阿多なりと並
ばて一種の隼人乃如く云ふ。式を考ずして妄説
なり。續後紀に山城国人右大衣阿多隼人逆足等云人
見えたり。又番上隼人等云ハ本國より上ぼれる
て仕奉ふ者なり。職員令義解に分番上下一年を為限と等
ふる是なり。續紀廿五に大隅薩摩等隼人相替等云こと
等見ゆ。隼人式に九番上隼人二十人有闕者取五畿内
及近江丹波紀伊等國隼人幹了者申省補之等ふ。類
聚國史に延暦廿年停太宰府進隼人等ふる番上隼
人のごとくハ非じ。又今来隼人等云ハ番上ふるあく
で本國より新に上ぼれる人なり。此も妻子洲も率て上る故に女も有り。式に見
者なり。此も妻子洲も率て上る故に女も有り。式に見
ゆ。九今来隼人給時服及塩云々。今来隼人身亡者
擇取畿内隼人充之二十人為限云々。式に見えたる
ども。此も中昔にも人数定まり有て召上せらるる

見えたり。諸儀に吹声を發るハ今来隼人乃職なり。類
聚國史に大同三年勅定額隼人若有闕者宜以京畿隼
人隨闕便補之云々。其女者不在補限等ふる也。女のこと
等ふ見ばば番上ハ非で今来の隼人なるべし。又續紀
廿八に隼人司隼人百十六人不論有位无位賜爵一級
等ふ。番上今来乃外に別に司隼人等云ふるやう
職員令隼人司に直丁一人の次に隼人等云ふ。是ハ
式に見えたり。白丁隼人一百三十二人等ふ
式ハ九大儀者預前申官喚集諸國隼人令供其事等ふ
ふを以て見ばば司隼人等ハ別なるやうハ詳
なるハ知がたし。威儀に隼人乃執る楯に鉤形を畫
等ふる。此も失ふる鉤を徴ふ。故事洲後世まで示さ
むるを形式なり。鉤字本
に鉤等作るハ誤なり。万葉十一十三に早人名負夜
音灼然等ふるも吹声なるべし。

元日又踐祚大嘗祭ぬ等ふ。隼人乃儀見えたる
式に右に引る式文の如し。抑隼人の京に上ぼれて仕奉ふ

事は見えたれば下卷朝倉宮段に所近習墨江中王之
隼人名曾婆加理を云ふと次に書紀に大初瀬天皇乃
崩坐し時に隼人晝夜陵側にて哀號て物も食ずて死
られたりとあり天武天皇崩坐し時大隅阿多
十一年七月大隅隼人を阿多隼人を朝廷にして相撲
隼人謀を奉る事書紀に見ゆ天武天皇
し給ふ持統天皇九年五月にも隼人の相撲を觀ハ
したまふ仁明天皇元年なり隼人衆を率て内附したまふこハ畿内
明天皇元年なり隼人衆を率て内附したまふこハ畿内
たまなり内附を記されたるハ漢籍に内附を云ふ
彼國に服して附たるなり隼人の入朝し事續紀に
もたまりを見ゆ大寶二年養老四年なり隼人を征討賜ひし

事を續紀に見えたれバ叛きたまひしにこそ
○其溺時之種々之態をハ彼弟命の塩盈珠を出し賜
ふ時溺を苦みたまひし狀態を令似行ふと云然子孫
に至るまで此狀態を仕奉ると此時に伏辜奉りしを
を長く忘ぬるにあらず書紀一書に火折尊帰来具遵
神教至乃兄釣之日弟居濱而嘯之時迅風忽起兄則溺
苦無由可生便遥請弟曰汝久居海原必有善術願以救
之若活我者吾生児八十連属不離汝之垣辺當為俳優
之民也於是弟嘯已停而風亦還息故兄知弟德欲自伏
辜而弟有愠色不與共言於是兄著特鼻以赭塗掌塗面

告其弟曰吾汚身如此永為汝俳優者乃挙足踏行学其溺苦之狀初潮漬足時則為足占至膝時則挙足至股時則走迴至腰時則捫腰至腋時則置手於胸至頸時則挙手飄掌自尒及今曾無廢絶神の上小海字脱ぬるを

其種々の態を委曲小云る傳へる足挙足踏行ぬ先物云ふ云て初潮云くより飄掌ぬ云ま又本書に乃自伏罪曰従今以て其種々の狀態なり

後吾將為汝俳優之民請施恩活於是随其所乞遂赦之

一書小云乃伏罪曰吾已過矣従今以往吾子孫八十連属恒當為汝俳人一云狗人請哀之弟還出潮涸瓊則潮自息云ふぬぬるを此俳優ハ即溺ル時の種々の態を為を云

ぬを職負令小隼人司正一人掌撿校隼人及名帳教習歌儛隼人司式小凡踐祚大嘗日云く其群官初入發吹悠紀入官人并彈琴吹笛擊百子拍手歌儛人等彈琴二人吹笛一人擊百子四人拍手従興礼門参入御在所屏外北向二人歌二人儛二人立奏風俗歌儛主基入亦准此大嘗祭式小進於楯前拍手歌儛ぬを見也續紀小大隅薩摩隼人等風俗歌儛を奏しぬを往々見えぬわ此風俗哥儛も彼俳優の遺れるぬぞるを上代ハ全俳優なるを後小ハ哥儛の躰なれるを故至今云く抑後世小隼人の職業ハ上件乃如く守護ぬ俳優ぬ二ツ有り然るぬ今火照命の能美ぬ言小ぬぬ

守護人(モリビト)なるべきのみ有りて、俳優(ワザヲキ)のおもむき無く、此處(コヽ)おもむき又俳優の方のみを云て、守護(モリ)の事は云(ハ)ざるハ、互(タガヒ)に書きて、相照(ミ)して心得るべき文(ブン)なるべし。然るハ非ず。互(タガヒ)ふるゝ足(タ)らぬゝ所(ヒ)あり。書紀の傳へ、ともに、おもむき俳優の方のみ見えて、守護の方を云るハ、只一書(アル)ふ不(ン)離天皇宮墻之傍代(ヨリ)吠(テ)狗(ニ)云(ハ)く、おもむる傳へのみ有り。其上文ふ恒當(ヨリナム)為汝俳人(ヲヤ)云(ハ)狗人(ヒト)おもむき。其故おもむ其下ハ是(ヲ)以(テ)云(ハ)くの文、とそ。但し故(カレ)おもむ云ら守護の事ふして、能優ふ非(ラ)ざるべし。

亦おもむ上の出塩盈珠(シテニヲ)而令溺(オホラレ)云(ハ)く事は美(ウツ)くしき事なり。能(ノ)美(ミ)の言は美(ウツ)くしハ見(ミ)ぬ(ン)ゝ。

於是海神之女豐玉毘賣命自(コヽニワタノカミノミムスメトヨタマビメノミコトミヅカラ)參出白之妾已妊身今臨産時此念天神之御子不可生海原故參出到也爾即於其海邊波限以鵜羽爲葺草造産殿於是其産殿未葺合不忍御腹之急(マヤ)(マヲレタマハクアレハヤクヨリハラメルヲイマミコウムベキトキニナリヌコヲオモフニアマツカミノミコヲウナハラニウミマツルベキニアラズカレマヤデキツトマヲレタマヒキカレスナハチソノウミベタノナギサニウノハヲカヤニシテウブヤヲツクリキコヽニソノウブヤイマダフキアヘヌニミハラタヘガタクナリタマヒ

故入坐産殿爾將方産之時白
其日子言凡佗國人者臨産時
以本國之形産生故妾今以本
身爲産願勿見妾於是思奇其
言竊伺其方産者化八尋和邇

而匍匐委蛇即見驚畏而遁退
爾豐玉毘賣命知其伺見之事
以爲心恥乃生置其御子而白
妾恒通海道欲往來然伺見吾
形是甚怍之即塞海坂而返入

是以名其所産之御子謂天津
日高日子波限建鵜葺草葺不
合命○訓波限云那藝佐
訓葺草云加夜

参出る日子穂〻手見命の御所なり○已ハ波夜久
用理を訓なし○臨産時ハ美古宇牟辨伎登伎迩那理
奴を訓なし○海辺を波限ハ同じ事なれ如くなれ
ども海辺を云る廣く波限ハ正〻波の打寄る際な

ども又波限を川池なを云故ハ海辺のをハあをるなれ
ハ波限なし此を殊ハ御名
ハ負せる由緒なれバ此なり万葉廿丁ハ宇美能奈
伎佐尓云〻和名抄ハ韓詩注云一溢一否曰渚和名奈
木左○鵜ハ上ハ出此鳥の羽多ともを葺草ハ用ゐれ
ども御を云なる故ハ云なり書紀釋ハ今按鸕口
喉廣飲入魚又吐出之容易之鳥也是以象産生平安令
葺此羽於産屋者欤を云ふ加ハ故也やうなれ漢籍
ハ此鳥不卵生口吐其雛故産婦執之易生を云る御
なり或ハ云不卵生を云ふ妄説なり是ハ鵜鳥を異
鳥なりを也○葺草ハ下ハ訓注ありて云加夜を云ふ凡
て加夜を云ふ此字ハ如く屋を葺く草ハ云ふ名なる

なるは上なる鹿屋野比賣神の処傳五の四に云るが如
く、なほ草は古名とも心得るは非なり。新井氏云、萩を今物
なり。日向國人乃云ふを聞に、彼國にては今もうがやと云
物のあるなりと。即鵜葺草葺不合尊の御産屋を葺かり
し物なりと云傳へたりとぞなり。うがやと云し物を萩なりと云
名近くきこゆれば、大古の時うがやと云しものをうみがやと云
も知らずと云へり。今思ふに、此説もさることなれど、
なきにも。以鵜羽云々とあるは、古傳に叶はず。○産殿は、
師乃宇夫夜と訓べきに従ふべし。書紀には産屋とあり。
作るなり。又此記黄泉段にも、千五百産屋と有て、宇夫
夜と云ぞ古の称なりける。書紀仁徳巻允恭巻などに
産殿とあるも、然訓べし。殿を作るは、夜を訓むをもて
ノを訓に限るまじ。云はりとも、此字必ず、ミアラカとよめば、夜
をと訓むはなるべからずなるを、これを太子の御な

まさば、屋と云むとはうがやと云べけれど、宮を御屋な
れば、屋とも云を。上下に通ひて家名なり。かの仁徳巻に、天
皇の御をバ産殿、臣のをバ産屋と、別て書れたるぞ。そ
れは文字にこそ差別はあれ、當時の言にては
共にうぶやなりけむ。さて兒の初めて生るゝ時の物をも
うぶと云ふなる。
事ども宇夫某と云ふぞ、古も今も多し。今世の言に、凡
まはうぶく、修めかざれるこそは、宇ハ生の宇なり。一つにて
なきなるを、宇夫といへり。宇夫夜と云は、夜ハ今此り鵜羽を
生まるゝ云称なるべし。以宇夫夜を葺けりと云説
も、古なるものぞ。宇夫てふ言ハ、産屋のみに非ず、
他の物にも事にも多く云称なる。其皆産屋より転り
あるのをも聞えざれば、鵜羽を葺けりしことを云ずし
う。○古語拾遺に、彦瀲尊誕育之日、海濱立室、于時掃部
連遠祖天忍人命、供奉陪侍、作箒掃蟹、仍掌鋪設、遂以為
職、号曰蟹守、今俗謂之掃守者、彼詞之転也とあり。和名
抄に、掃部寮加爾毛理乃豆加佐とあり。加爾毛理で
官名を、借に蟹守とあるべし。和泉國和泉郡の郷名乃掃

守ハ加尓毛利なり。さて姓氏録に掃守連振魂命四世孫天忍人命之後也雄畧天皇御代監掃除事賜姓掃守連なり。異なる傳なり。はて此御産殿のこと今日向国那珂郡宮浦村の海辺に其御跡なり云て大なる窟あり。鵜殿窟なり。鵜殿窟なり云中に社ありて鵜戸権現なり云此なり。○未葺合ハ伊麻陀布伎阿幣奴尓なり訓なし。其由ハ下に云むなり。○不忍御腹之急故なり美波良多幣賀多久那理多麻比祁礼婆なり訓なし。急なり迫なる意なり。万葉十六に将死命尓波可尓成奴なる尓波可ハ迫れる成云なり。此なり。急と尓波加尓なり訓なし。はや御子生坐むなる御腹のこなりて産殿を葺終ぬを待間を堪がなり賜なり。○爾将方産の四字舊卯本又一本なし。今ハ真福寺本延佳本又一本なに依る。○日子ハ上ハ千尋神段に日子遅神下文に比古遅なるに同じ。なを遅字の脱なる。故比古遅なを訓なし。穂く手見命を指て申せるなり。此称の事上傳十一の三十二葉に云る。師ハこを御子なる云なしかなり。其意なるハ彼ハ千尋神段なるはなり。○以本國之形ハ本國能形尓那理豆なを訓なく。以本身を本能身尓那理豆なを訓なし。そもそも如此白志て八尋和迩に化て産給ふを以て見ばなり。海神ハみな真の形なる魚なる。人に交る時假り人乃形なる化居賜ふなり。○願勿見妾ハ阿袁那美多麻比曽なを訓なし。願字讀なり。此字を讀此言黄泉段なも見

えるわ。○方産ハ麻佐加理尓御子宇美賜布表を訓ゞ
志書紀ハも方産を訓ゞ書紀ハ顧眄之間此云美屢摩
沙可利尓万葉七 二十七丁 ハ壯子時我度為石走者裳方産を師
を。ミ。コ。ウ。ム。ミ。サ。カ。リ。ニ。を訓もるハ右ハ書紀の訓
注の格なゞれゞ又右乃万葉ハ如く。みさうりを上
ハも云ゞ麻を美を同じ。麻佐加理を俗ハ真最中を云意なわ。舊
印本ハを産の下ハ時字ハゞ。餘本にを並無し。有もあ
ゞを師
ハ云れし。○竊伺ハ加伎麻美を訓ゞし。垣間見るゞ。書
紀ハも視其私屏を云わ。後乃物語書ハゞハも多き言
ハて其を必しも垣の間ゞ孫ゞも物の隙ハゞなわ。
竊ハ見る況云ゞ。加伊麻美を云ハ。垣の伎ハ例の音便
ハ伊を云るハて。やゝ後のゞを云わ。

故今ハ正きハ就て。加伎を訓ゞ万葉十ハ垣間を云わ。○八尋和迩を甚大きわる
鰐ゞ。○匍匐ハ波比を訓ゞし。白構原宮段の哥ハ伊
波比毋登富理。伊ハ發語わ。万葉三 五十三丁 ハ若子乃匍匐多毛
登保里 又九卷ハ迷匍匐 借字ハも用ゐ。なゞわ。此字上ハも見也
て。そハ波良婆比を訓ゞ。傳五の六 中卷倭建命段ハ匍
匐廻。○委蛇ハ毋許余比伎を訓ゞし。伎ハ辞なゞ。許ハ
う。此清濁定 書紀ハも逶蛇を訓ゞ。字を委蛇
を。逶蛇を訓ゞ。形ハ
説文ハ斜去貌を注を。逶蛇ハ作て義も種々わる中ハ
余布ハ用ひ。なゞや此ハ近かゝ多。毋許
乃行貌ゝ取を。意を蛇るゞし。文選江賦ハ神蜈蚣蟠蜦を
云ハ。蟠蜦注ハ行貌を。モ。コ。ヨ。フを訓ゞ。うゐ物語 樓上巻

ゐ逃て作きりとよひ行くいまばゝ云く源氏物語葵巻ゐ
大臣ハえ立もいづ足賜ひ爲かゝ依齢の末ゐ若く壯
の子ゐ後き奉て。そとよふゐ。恥泣ふるぬなぐ
あり。ちて此を匍匐委蛇をバ輕く見ぢ。ぐ鰐ゐ化
給て依形狀を云るゐみる。書紀の或注ゐ産時のなやみ乃ゐ云ゐ云る
ハとろ。○伺見ゐきも加伎麻美を訓ぢ。○心恥を宇良
波豆加志を師の訓きゐふゐ從ふぢし心を宇良を云
を宇良賀那志宇良佐備志をを是ぢ。万葉十四二十五丁
ゐハ心ゐをきゐ宇良毛等奈久心やぢをを宇良夜
須尓ぢをゐ第。○生置ハ下ち返入を云ゐ係て見

ぢし御子ゐバ置て御自ハ海神宮に返給ふ。○恒
を都涅波を訓ぢし今までハを云意ゐて上ゐ恒無歎
をちる恒ゐ同じ。さてこを欲を云ゐ係る言ぢ。ツネ。ニ。を
訓て往来を云ゐ係て今より以後のゐ、見るハ非ゐ。○海道ハ宇美都治を訓
ぢ。万葉九二十八丁ゐ海津路書紀景行巻ゐ海路ゐあ
ゐ。○通ハ師の登富志豆を訓きゐる宜し。凡て登富流
をハ此ゐ彼ゐ行到る依云て雨ぢをゐ衣の沾て表より裏ゐ徹る多沾登
富流を云類の登富流を同言ぢ。今俗ゐ登富志を
ど經て行を某処ををほるを云ハ違ゐ。
令登富良ぢ。此を海神宮を此上國をち間乃海路を
誰も易く往来志て互ゐ到ゐぢ。ぢる依云。○往来

を加余波年と訓ぜし書紀万葉ともに然訓る例あ
るとて此を豊玉毘賣命の御自ら産のみかゝる
大凡の世人乃事を廣く詔ふかり○欲字ハ通字ハ上
ふる意なり恒云く欲しと云ふべきなり○然字
ハ讀ゐかゝる於母比斯袁と云袁ふ此字ハ意を帯る
夫木集ふ実清朝臣契りふかるがゆをを○甚作作
字諸本皆作と作るハ誤なり真福寺本ふ恠と作るも誤る師の作
を誤ふるを云れゝ正當なる考ふ故今然
改弟記中巻玉垣宮段ふ是甚慚と云る金同き文ふ
ふべも思合ひゐ万葉十八二十ふ左刀妣等能見流
目波豆可之とて此を甚作加志伎許登と許登と云辞
を讀附ぜし許登余と云意ふて雅語ふを常ふる格ふ
る古今集哥ふ云く吾を欲と云ふ○海坂を師の字那
ハしれること此等ハ如ふ
佐加と訓るふ従ふぜし延佳ゲ坂字ハ路の誤坂
を堺乃義なり佐加比と上ハ此方より上る坂と彼方ら
ふ海と上ふ既ふ云るが如し且て坂と合の意ふ
云て即堺のこと ふ
と此上國と間乃隔ある處を云なり そこふ山坂の
杪も陸地の坂堺ふ准るにも非き
て坂とハ云ふなり万葉九十八ふ浦嶋子を賦る哥
ふ海界乎過而榜行尓海若神之女尓邂尓云く と
海界も此と全同じ
ば相證して彼をウナサカ

を訓ぜり。此の坂も堺の意なる由を明らかに。彼海界を今本
ハウミギハを訓ぜり。師ハウナベを訓ぜり。共に訓ぜり。○塞ハ勢伎豆を訓ぜり。
勢久を訓ハ閉塞ぎて不令通を云。関も其を躰言なり。
名なり。○返入て海神宮にあり。さて加く此時に海
坂を塞ぎ賜ふ因て永く海神宮乃往来ハ絶
なり。○是以て上乃於其海辺波限以鵜羽為葺草
云々の事を兼て云ふ。○天津日高日子ハ上に出傳十五の
三○波限建上に於其海辺波限云々を見る。書紀一書
に曰ふ遂以真床覆衾及艸裹其児置之波瀲即入海去矣
を云ふ。かゝる由を以て如此名を奉れるなり。建ハ

美称なり。建て称て多くハ上に著例あれバ此も
下に係て讀ぜるも思ハるを不此て上
に係るき故なり。後なる倭建若建を申に例もなり。○鵜葺草真福寺本に此葺
字無きハ訓注にもなし。其て書紀ハ鞆の
ハ衍字にして削るべし。但し云加夜の訓注上に
ふて思ふバ彼本をいはるきに
あるべ故姉葺字無き方に就ていはバ諸本に此を
葺草と加て上ハ後に加ふ
ふの字訓て字ハ後に加ふ
クサと訓て字草ハ一字を加夜と訓ぜ
ふ然も今諸本並葺字
加夜と訓ぜり。又上なるも加
バ彼本ハ取らず訓注の上に
ふて波限の訓注も然
ふのかやと水鏡
昔然もよみしかや。○葺不合ハ俊成卿の古来
風躰抄に此御名をうけはぬきにふ書

き。鵜草を。うのはやなるを。不合を。阿閇受やと云る。甚宜
志。必古き擿ぞ。ゆえ乃ち是。を従えて訓ずし。阿波世受
を切えて。阿閇受やと云ハ。古言なり。下巻朝倉宮段御哥
に。麻那婆志良袁由岐阿閇やゆのも。尾行令合ゆと。此
他りも。令合を阿閇と云例多し。ヲキアハセズノ命
せずと云言。御名に似たりしかども。訓をもちゐし。ゆは
上代の名に。然詞乃調べあしく。既を無なるや。
屋を葺に。此方彼方共に軒なり。葺上りて。棟に葺合
せて。終るなる。故なり。葺終る処。葺合ゆと云なり。
六帖に。思ふ人雨と降来る物なら。云なり。
バ漏るゞ屋根を合せざるし。○書紀に云。後豊玉姫
果如前期。將其女弟玉依姫。直冒風波。来到海辺。逮臨産

時請曰。妾産時。幸勿以看之。天孫猶不能忍。竊往覗之。豊
玉姫方産。化為龍。而此間に文脱甚慙之曰。如有不辱我
者。則使海陸相通。永无隔絶。今既辱之。將何以結親睦之
情乎。乃以艸裹児。棄之海辺。閉海途。而徑去矣。故因以名
児。曰彦波瀲武鸕鷀草葺不合尊。児やのみありて。鵜羽
のこやなりれば。御名乃宇賀夜ハ。此傳かてハ。もゞ草
名りや。然らバ鸕鷀草と書れ。ハ。借字やせやの。又
上に産屋のやも見ゆ。葺不合も。何の由ぞ。
明らかなるバ。かかに故因以名やと云なり。
通え。一書に。先是且別時。豊玉姫従容語曰。妾已有身矣。
ゆ。
当以風濤壯日。出到海辺。請為我造産屋。以待之。是後豊
玉姫果如其言来至。云ゝ。猶以櫛燃火視之時。豊玉姫化

為八尋熊鰐。匍匐逡巡。云々。所以児名称云々者。以彼海濱産屋。全用鸕鷀羽為艸葺之。而甍未合時。児即生焉。故因以名焉。一書曰。先是豊玉姫謂天孫曰。妾已有娠也。天孫之胤。豈可産於海中乎。云々。屋甍未及合。豊玉姫自馭大亀。将女弟玉依姫。光海来到時。孕月已満。産期方急。由此不待葺合。径入居焉。云々。化為八尋大鰐。云々。天孫就而問曰。児名何称者当可乎。對曰。宜號云々。言訖乃渉海径去。一書曰。云々。豊玉姫大恨之曰。不用吾言。令我屈辱。故自今以往。妾奴婢至君處者。勿復放還。君奴婢至妾處者。亦勿復還。遂以真床覆衾及艸裹其児。置之波瀲。即入海去矣。此海陸不相通之縁也。一云。置児於波瀲者。非也。豊玉姫命自抱而去。久之曰。天孫之胤。不宜置此海中。乃使玉依姫持之送出焉。

然後者。雖恨其伺情。不忍戀心。因治養其御子之縁。附其弟玉依毘賣而獻歌之。其歌曰。阿加

陀麻波袁佐閇比迦禮杼斯良
多麻能岐美何余曽比斯多布
斗久阿理祁理爾其比古遲三字
以音答歌曰意岐都登理加毛度
久斯麻邇和賀韋泥斯伊毛波

和須禮士余能許登碁登邇故
日子穂穂手見命者坐高千穂
宮伍佰捌拾歳御陵者即在其
高千穂山之西也

然後者ハ一句を隔てゝ不忍戀心ゑ云ゑ係まゝ然ゝ斯加礼杼毋ゑ訓ぼし上の白云ゝ返入ゑ云ゑ兼て云るなる

○雖恨ゝ宇良美都ゝ毋ゝ訓ぶし後ゝいゝ恨那賀良の意ゝ○不忍戀心ゝ許比志伎尓延多閑多麻波受豆ゝ訓ぶし此言ハ下ゝ献歌ゝ云ゝ係ゝ○治養ハ比多志麻都流ゝ訓ぶし中巻玉垣宮段ゝ日足奉ゝ而ゝ此字ゝ意ゝ多志ゝ令足ゝ今世ゝ言ゝ令足ゝ多須ゝ云ゝ書紀私記ゝ云比太須其義如何答師説凡人子初生日数最少而漸ゝ長養日数最稍足故謂養長其子為日足耳云ゝ如ゝ児ゝ日数ゝ積ゝ随て成長ゝ物ゝ故ゝ日数ゝ足ゝ意以て養育ゝ然云ゝ書紀ゝ養長養持養膝養ゝ皆然訓ゝ

上宮記釋紀ゝ引ゝ無親族部之國唯我獨難養育比陀斯續紀四ゝ人祖乃意能賀弱児乎養治事乃如久治賜比慈賜万葉十三二十八丁ゝ何時可聞日足座而成長賜ふ自の多良志ゝ多理ゝ延ゝ令足ゝ多良志ゝ非ゝ見ゆ倭姫命世記ゝ豊鋤入姫命吾比足止曰支ゝ云ゝ老賜ひゝ云ゝ如ゝ聞ゆゝ又今俗ゝ病乃愈ゝて後漸ゝ健ゝ云ゝ比陀都ゝ云ゝ肥立ゝ書ハ俗ゝ意ゝ多ゝ加て此ゝ日数乃經過ゝ日足ゝ同意ゝ陀流ゝ訛ゝ書紀一書ゝ亦云彦火々出見尊取婦人為乳母湯母及飯嚼湯坐凡諸部備行以奉養焉于時權用他姫婦以乳養皇子焉此世取乳母養児之縁也ゝ此御子ゝ日足奉ゝ委

云風傳あり。○玉依毘賣御名意玉を御姉の御名とかふ
同く依を字ハ借字にて余呂志の切なるなり呂志を理の切なる余呂
志を師説ふ物乃足ア具なる説云余呂都余呂布なるべ
も同言とかふ分れ〻なるべかり。万葉一ふ取与呂布天乃香具
山なるも此山乃よりなびなるのひ足なる説云るか
足又宜奈倍吾背乃君なぞ云るも同じなる云也ぐ
如し此意を以て美称なる名なり名の例を男をハ飯
依比古建依別稲依別なぞ女ふを伊須氣余理比賣息
長水依比賣水穂五百依比賣なぞ云なり續紀廿七ふ與
呂志女なる云名も見也なり玉依てふ同名を書紀一書

ふ栲幡千〻姫一云萬幡姫児玉依姫命此記水垣宮段
ふ活玉依毘賣なる賀茂御祖神の御名も玉依姫なり。
山城風土記ふ見也。皆右とかふ意乃称名なる神名帳ふ信濃國埴科
郡玉依比賣神社ある是を何を祠を法ふなる事。
○附を〻なる万葉廿ふ常陸さ〻行を雁を
が吾恋をなる都祁豆妹ふなるせひ古今集春下
ふ吹風ふ誂なるなる物なるば此一本ハよりなる云ハ
ま〻伊勢物語ふ宇都の山ふ至なて云く修行者遇を
なる云く京に某人の御許ふて書かきて送く此送を真字
本ふ傳なるなり告なる心得るハ非なり。都久を同じ此

処の趣を豊玉毘賣御自ハ本國に還去給ひしうぜも、
御子を此國に遺置奉賜ふ故に其を治養奉らもを
もとをに御弟に玉依毘賣を此度参らせ賜ふ其便に
附給ふ所なり然きバ縁に因て云ハ其便に云意
なるべし又思ふに因治養其御子之縁ハ豊玉毘賣
恋しに得忍給ハぐれぐも既に訣別て海
坂を塞て還坐ふ所ふ又立廻て逢奉賜ふ故きに
もなるべるが故に御子を治養奉ふ為に云なて
其を縁として玉依毘賣を遣して哥献て給ふ
うりに其意ハ其御子表治養奉流表余斯も
ハ志豆を訓ぶ万葉十一に久方乃雨も零奴可其乎
因將為を同じ詞なり然きぐも初に云る
ふ依ぶ書紀一書に是後豊玉姫聞其児端正心甚憐重欲
復帰養於義不可故遣女弟玉依姫以来養者也于時豊

玉姫命寄玉依姫而奉報歌曰阿軻娜磨迺云々なる
も此記乃趣を近し但し此記に不忍恋心なるハ夫
給ふなハ非きバ是ハ異なるを所に此事ハ下に論ふぶ
彼紀なるハ上に豊玉姫将女弟玉依姫来到なるきば玉
依姫も初に御姉なる共に来坐ふなり然きバ御姉の
返去坐しを時に又共に返去坐しを也但し此記なるハ玉
今又更に参らせ給ふなるぶし
依毘賣初に御姉や諸共に来坐し事ハ見色ざきば此
度始弟て参らせ賜ぬを聞えるかくて此處に正
ふく来坐ふなるハ見えぎれ彩も其をかのぶう然
聞迩て明し又書紀本書に豊玉姫将其女弟玉依姫来
到一書に留其女弟玉依姫持養児なるぜなるも初より

将て来坐し趣なり。又一書に、一云、置児於波瀲者非也。
豊玉姫命自抱而去。久之曰、天孫之胤不宜置此海中。乃
使玉依姫持之送出焉。とあるを、一の傳へなり。○献歌を
も。当時文字ハ知らざるべ。後世の物か書て其を献る如
くかも非ず。もし御口傳へか奏し賜ふ事云ふ。宰ハ御
言持か
て。ものゝ古き称なり。然るに、ハ御言を持つも云むりハ口
ものゝ古き称なり。然るに、ハ御言を持つも云むりハ口
贈るゝ出来て乃世の詞云ひなし。又も後か物か書て
献るゝハ云傳をゝかもいふ詞を以て。○其歌曰を師ハ曾
能字多ゝ訓て曰字ハ讀也ざるべ。是ぞ皇國の物言ひ
ハ。曰字ハ。もし漢文の例か書ふ
のみ知らもしきかいふ。○阿加陀麻波々赤玉
者知。こゝに契沖ハ海底の珊瑚なるゝ云ふも。ゝて
限なるゝし。もし赤き玉なり。又書紀の注ふ。

明玉なるゝ。ゝるゝ。此記かてハ殊か白玉ゝ對ふ
ゝるにゝうかゝ。又吾玉ゝ見て草不合命の御ゝゝい
云ふ。ゝ。ハ殊か。○表住閑比迦礼杼ハ緒副雖光なるゝ。
貴ふ緒まで映きて光照を云て玉ゝ甚美麗きゝ
ふ。○斯良多麻能ハ白玉之なり。下か如きゝ云言を添へ
て意得べし。此格古哥以上三句書紀ハ阿軻娜磨廼
か常多し
此訶利播阿利登比鄧播伊珮耐ゝ。○岐美何余曾
比斯ハ君之儀しかて君ゝ夫君穂ゝ手見命を申給ふ
ふなり。斯ゝ助辞なり。○多布斗久阿理祁理ハ貴有を
ふなり。此貴ハ上か益我王而甚貴ゝ。ゝ同くて美
く好き多云ふゝ彼処傳此巻の云ふ如し。万葉六
二十五葉

ふ貴吾君かぞ。○一首は意は赤玉は緒さ貫光る
て。いと美好しけれども。其よりも白玉の如くある君
ぞ御光儀ぞかしこきて美きを云て。恋慕ひ奉る御
情を述賜ふ歌なり。人を玉に譬へるは。万葉七十九丁
ふ奥津波部都藻纏持依来寸方君尓益有玉将縁八方。
廿二十九丁ふ都久比夜波須具波由氣等毛阿毋志く可多
麻乃須我多波和須例西奈布毋白玉に譬へるは。書
紀武烈巻影媛に贈賜ふ御哥に。挙騰我涕你枳謂屢箇
皚比謎拖摩儺羅麼婀我裒屢拖摩能婀波寐之羅陀魔。
万葉十九十六丁ふ白玉之見我保之君乎。此外にも多し

ける如く色さは玉乃中に白玉を殊に勝れる故に
赤玉に對て譬賜ふなり。或説に三四の句は天子
装束を云ふ云るは。こなたし須賀多なるは白玉を佩るを云ふ。其御
余曽比を云ふ。其意うれ思ふ人もなるは法なれども。然
ら定。余曽比即光儀なり。ふを人を玉に佩ふるを云ふは非。其装束は意に
玉を佩ふるを云ふは非。其装束は意にも白
譬なり。さて此御哥書紀の趣は白玉に譬ふ定て。
ふ君の儀を赤玉に對て彼紀をは。
聞其児端正心甚憐重云く。
ばよろしを尊不合命の御事なり云ふ。然も御
哥は然は聞え定。決く夫君を恋奉て。よみ賜ふ
ふ趣はもしば聞其児云く云ふる詞や哥や。相叶は定い
うべぞ思ふ。○比古遅土に出ふ。此も穂く手見命を申を
ふるなり。○答歌曰は許多閑賜祁流美宇多を訓ぼし○
意岐都登理は奥に鳥なり。奥に住鳥を云て。鴨の枕詞

なるあり。野の鳥雉家の鳥鷄嶋の鳥鶏などの例の如
志。彼の師の冠辞考の委し。其餘万葉十一四十三丁の奥
尓住鴨之浮宿之十四二十八丁の於吉都麻可毋十五十一丁
の於伎尓奈都佐布可毋須良毋なども有り。○加毛度
久斯麻迩も於鴨著嶋あり。著は度久を云る例も上傳十
六の十の底度久御魂を云る度書紀に豆を有り。此
よりて此記の度をもづよむも非なり。此記に一
字を二音の通用ひ〻る假字の例なし。度ハドの假字
の用度を豆を通ずる例多し。杼伎多豆伎などもこ
なし。さて此著ハ清音なるべき処なれ。度も豆も濁
音なるも古へは音便にて。かゝる例多しはて著ゝ寄を

云むの同じ。船なども寄は手著を手寄を同きをと思ふ。嶋も海神宮
を指て詔ふ形なり。かゝて鴨著を云まで嶋を云
名の係て詔ぶ。まも序のみ形なり。此海神宮の鴨の寄
を云ふは非ず。或説の万葉に奥鳥鴨云船を引る説
て此乃鴨も船なるべし。給ふ係りて嶋ハ
加の無目堅間乃小船乃著もりし嶋なりを云るハ。由
ひげの間ゆもを非なり。上代に船をくゞの鴨を
のみ云ず如きこを。きて海
ハあるべきなり。
を賜ふる海路を経て到る處なる故に海表の
ひ尋常の嶋の准ふて詔ふ係りこの嶋をいけ
を。契冲が云るハ。似ぬはなるべ可怜小汐なり
こもの小汐の関うこを。はなるハ間也を非なり。
哥の嶋をよみ給ふを以て海神宮も一の嶋なりを
云證にもまもまを然るものを間ゆれ

ぞ。然るハ非也。志麻ゆゑに。必ずよの海上
ゆあ嶋を云めるハ。國號考に委く云るごとく。國郡海門村に海童神社あり。
なる處を云名なりとぞ。國江居郡海門村に海童神社あり。
又或人の云。今薩摩國江居郡海門村に海童神社あり。
海門の後なる山を。今も鴨山と云。神代紀に海
宮と云るハ。此海門山のことなり。後世人の此乃御哥
に事なり。今も鴨山と云ハ。後世人の此乃御哥
に依て造り設たる名なり。名ゆゑ聞えたる類ひなり
くゆゑ。
俗ぞかし。○和賀韋涅斯ハ。契沖云。我率寢しなり。謂
を古事記にハ韋濱成式に為て書て。伊以ゆゑ同
じかりざきば。我寢しにゆゑ非也。妹を率て寢
ゆゑなり。古事記雄略天皇御哥に。多斯尓波韋涅受。
和加くゝ閑尓韋涅豆麻斯母能。万葉十四に。伊伎豆久伎
美乎為祢豆夜良佐祢。安麻多欲母為祢豆己麻思

乎。同寸六に。橋寺之長屋尓吾率宿之。みな率て寢るに
ゆゑ云ゆゑに。遠飛鳥宮。殷の哥に。多志陀志尓韋涅
豆年能知波。ゆゑ寢なり。伊涅ゆゑ以ゆゑ。其ゆゑ
伊の假字に。異なり。思ひ混ふ。
かゝる。凡て率ゆゑは。身に副て附る。云て。ゆゑ行
也。きぬを引從て率寢ハ。身に副附て寢るなり。孝德
て身にそふなり。
紀の哥に。陀虞毘預俱陀虞陛屢伊慕乎。多例柯威尓鷄
武誰ら率に。ゆゑ。○伊毛波和須礼士ハ。妹をバ不
けゆゑ。
忘なり。妹ゆゑハ。豊玉毘賣命。多指て詔に。礼を書紀
ハ。邏ゆゑ。濱成哥式に出。ハ。此記ゆゑ同く。礼
ハ。邏ゆゑ。濱成哥式に出。書紀纂疏に不可得忘也ゆゑ注を
ら。邏ゆゑ。邏ゆゑ。意に見給ふ。
て。誤なり。邏に。意を忘じなり。又契沖ゆゑ礼ゆゑ

還を五音に通ずと云るも精しからず凡てかく言ふ活く処も五音の轉用定まれる格あるて漫りに通ハし云ものに非ず其轉用ハ従ふて意も轉るものなるべし然るに忘れじを云も通音の故なり非ず別に一ツの活用ハ常に通ずるに通ずるに通ずるに非ず例あるも隱れも常にかくるもの活用く格なり古ハさ活用く活用く例ハ古ハかくるいまの活用くかくるに同じ後世にも一ツ言の二種に活用く云ふ多くなり又六帖に此御哥をとぎとこそ云題の処に出して此句をとるもの故に士を受に改ハ終句を世に事毎に意を見るもの故に士を受に改るなるべし。

○余能許登碁登迩ハ契沖云世の盡に同じ世乃限に意なり万葉に多知之奈布伎美我須我多乎和須礼受波與能可藝里尓夜故非和多里奈無此意に同じと云ふ事ハ事毎に意を改るハ非なり盡て言ハ常に数

つる物多一ツも遺さぬなるに意なり云ふ限り意なり云ふ限り意なり云ふ限り意なり

四に夜者毛夜之盡畫者毎日之盡此二ツの盡字ハ異なるに訓ともに

丁に夜者毛夜之盡畫者毎日之盡此二ツの盡字ハ異なるに訓ともに

みな非なり此の御哥ハ相照し十七三十九丁に久奴知許

て コトと訓ぶに決し

登其等夜麻波之母之自尓安礼登毎ハ畫なり國

内の限りに云意なり

○万葉二十

云意なり

貫之集に櫻花ちらぬ松にはなもなり

色に出ぬに見なし世紀冥爭是も色乃ちむ限を云

意なり

こゝに契沖ハ松に櫻を面くに此を正しく

同じ

○余も人の生涯多云世に御自ハ御齢なり

右の万葉に貫之集なり皆同じ

凡て人の命ハ間を世を云ふを常

多く結の迩書紀ハ母乃ちの六帖又濱成歌式に出

せるはかぞへハ此記ぞ同じ迹ぞ云るハ世の限りまでぞ云ふ同じけまでぞ云ふ同じく母ぞ云るハ世の限きバ何をふても同じ。さて右ハ二首歌書紀ハ豊玉姫云く言訖乃渉海徑去于時彦火々出見尊乃歌之曰。飫企都鄧利云く是後豊玉姫云く寄玉依姫而奉報歌曰。阿軻娜磨迺云く凡此贈答二首号曰挙歌ぞ。挙歌の事ハ遠飛鳥宮段傳三十九ふ云ふし此記ぞ贈答反ぞ相換ぎ。何をふてを通ゆる中ふ御歌のぞ思ふ此記の方やゆるされ。谷川氏此記乃方を非陰陽唱和之義ぞ云ふ々例の漢意ふぞ〻ふ〻ふ多。又一書ハ初豊玉姫別去時恨言既切故火折尊知其不可復會乃有贈歌已見上ぞ。豊玉姫の答歌の事

無き此を一ッの傳ぞ。但已見上ぞ云ふ答哥ぞ。○高千穂宮ハ白檮原宮段の初ふも坐高千穂宮而云くぞ。ふのをば彼御世まで御世〻〻此宮ふ坐坐ふ。抑迹迹藝命天降坐て初て笠沙之御崎ふ宮敷坐ぞ。

上傳十五の八十七葉ふ見也る如くなをば此高千穂宮ぞ申。況も即彼笠沙御崎ある宮なるぞ〻思はる〻ぞ。又よく思ふ高千穂ぞ云名。又御陵も其高千穂山ふ西ふ在ぞふをバ此宮ハ彼笠沙御崎ある〻〻別ふて笠沙御崎ハ必薩摩國ぞ。其地ハ〻〻ぞ。上ふ云ふが如し然もバ其地ハ〻〻ぞ高千穂宮ぞハ云ふ〻〻ぞ彼山よりぞやゝ遠き大隅國ふて高千穂山ふ近き地ぞ〻〻聞

えるなり。薩摩國人の云、火く出見尊は宮を大隅国桑原郡宮内と云地なりとあり。神名式に同郡なる鹿児嶋神社も此尊を祭れり。今は正八幡宮と申して云と桑原郡は高千穂山に近き域なりとあり。かゝる地理を尋ぬるに此高千穂を霧嶋山を云あり。高千穂山の事、傳十五の七十の葉に委く云るゞ如く其をかゝれに二あり。何故に此宮の名は高千穂を必うは霧嶋山なるべき詞なり。御陵の在処は以て知るべきなり。此御陵の在処乃事は下に云多考見るべし。若是を日向の臼杵郡なる高千穂とは此に依て思ふに御陵の在所に叶はざる歟。穂峯なるは二處共に同名なるを思ふに神代の御典に高千又霧嶋山と共に其山なるべし。其を皇孫命初て天降坐し時、先二乃内の一方は高千穂峯に下り着賜ひて。今一方の高千穂に移幸しなるべし。其次序は何れ先何れ後なりしも知るべきにあらねども。終に笠沙御崎に留賜ひしは臼杵郡なる高千穂山なりて。其より霧嶋山に遷坐して。其山を下りて空國を行去て笠沙御崎に到坐しなるべし。かゝれば神代の高千穂を云しは二處あり。此も彼も同名なるは古に混じて一の山なるべし。書紀に語傳来て此記に書紀に然記されるべし。然二處共に同名なるを負て所以あり。書紀に襲之高千穂峯とも有るべし。襲は大隅國なれば是霧嶋山なり。高千穂を云し證なるべし。

○古事記傳十七

○八十三

かゝれば初迹々藝命は笠沙御崎なる宮に坐して穂々手見命に至て此宮に遷坐しなるべし。

○伍佰捌拾歳に成て神代の年数の事。今こゝを加へむとす。中に論ふべき事は思ふ人に成るべし。然に此に如此見え書紀にも見えたれば必なるべし。書紀神武巻に首に自天祖降臨以逮于今一百七十九萬二千四百七十餘歳なるは三御代

迩く藝命穂く手の總て年数なり。此年数のいみし
見命葺不合命、多く久き世
近き世なれば、なほ人の心りは、信らとなるこそ
思ぬうち、種くの説あれども、皆漢意のけうらなり。
もし古傳のまゝ、今假に此数を三御代に等く分ちなば
よく心得ぬし。一御代大凡六十萬歳許ばかりなるべし。然る多此に
そ一御代大凡六十萬歳許ばかりなるべし。然る多此に
五百八十歳なりの永きことなき短さにて、かの總て
数甚くつたうはざるい如何ぞ云に、彼石長比賣
の事に依て、父の神の天神御子之御壽者木花之阿摩
比能微坐を詛白賜ひしに因て、至于今天皇命等之御
命不長也ものを、穂く手見命とあるこは、御命と
よりく短く坐ばき理なり。かの詛言迩く藝命は関係
給ひ、其御子なる御継く

加詛奉れる
りけるなり。然もバかの一百七十九萬云くは年は多
くは迩く藝命の御世に經過て、穂く手見命なる僅に五
百八十歳、次に葺不合命は、いよく短うなるべく、次に伊
波礼毘古命に至て、又いよく縮まて、百三十七歳に志
て崩坐しなりとかい礼ば、此御年は数のあるこは何ぞ疑
ぬべき。然る加倭姫命世記に、後世の書ぞもに、神代
の年数を迩く藝命三十一万八千五百四十三
年、穂く手見命六十三万七千八百九十二年、葺不合命
八十三万六千四十二年と記るるは、いみしき妄説なる
こそ。そもく三御代、次く如此御命長く坐むこそ
も由なく、又葺不合命は、然ばうり長く坐りるに、其御
子の神武天皇は、俄に縮まて、百餘歳なりし
なり。何の由ぞうせ争いぞ、かの詛
言の驗にはもなるなりもも云むうこれぞ二御世
殊に長く坐して、其を過て後に、俄に驗のあるはなる

きかも非ぬをや。右乃年、数も後人の彼神武紀の年数
かゝ攪て其を妄り三御代か分配して定めるものか
て彼誣言ける事多も思ひ過しかく此記か此りかく五
百八十歳やゝ有るなぞ考ふべしゆゑなく物しらぬなり。次くか年、数を多くもつるハ御世乃
弥益か長久しかりしかゝ祝奉れるゝ後ひ
ゝ。此三御代の年を合へるとばうけ神武紀かる
数や全く同きハ是後人乃忘れざなる證なり。凡て上
代の傳もかくまるけもあるハ必此彼を全くハ同じ
かゝぬりけるとばかるとも右の三御代の年数を神
代巻口決かも三十万八千五百三十三年六十三万七
千八百九十二年八十三万六千四十三年を分るり此
も少し差ける也も三十万の万の上か一字を脱し此
を此か誤るゝ初か云ふを同じ御年なるを。
○御陵も美波加や訓ぶし万葉二十四丁か八隅知之和
期大王之恐也御陵奉仕流山科乃鏡山尓云く師の考
か古も天皇け山陵ゝも御墓やぞ云ふ。此も御陵

やハ書れぞみさゝぎ凡やハ訓ぶ。必みはうや訓
ぶるとばるとやるる書紀仁德巻推古巻かぞか難波
荒陵や云地名もるる源氏物語須磨巻か院の御はう
やるる又御山やるる古書かも御陵を築くを山作やるる
も古き称るる和名抄か山陵美佐ゝ岐ゝ諸陵寮美
佐ゝ岐乃豆加佐やるる但し某天皇の御陵ゝ云や
きハ美波加や云ふく其御陵を指てハ美佐邪紀やも
云ふし。ゝやるるバ某延の美佐邪紀も某天皇け美波加
ぞかぞ云むが如し某天皇の美佐邪紀ゝハ
云ふ。凡て同物も指るるかるて名けうはる類多
き。後世かるてハ陵をバ墓て美佐
邪紀や申して墓や別ゝやハかるる美佐邪紀

の事ハ下巻ニ佐々紀山君ヶ注傳四十の三十七葉ニ云ふし。
○在其高千穂山之西也書紀ニ云ふ後久之彦火々出見尊崩葬日向高屋山上陵ニ云ふ口決ニ高屋前為竹屋也前ニ見ル竹屋ヲ以竹刀截其児臍其所棄竹刀終成竹林故号彼處曰竹屋ト云ふしかるなり延喜諸陵式ニ日向高屋山上陵彦火々出見尊在日向國無陵戸松下氏前皇廟陵記ニ薩摩國阿多郡大隅國肝属郡俱有鷹屋郷蓋二郷境相接恐此地之山ヲ云る此説信ニ謂ふ但し阿多郡ハ肝属郡ニ相接きて一ッの鷹屋の二郡ニ跨ふ其地理を知らざれバ詳ニ難し又和名抄ニ大隅國肝属郡鷹屋薩摩國阿多郡鷹屋ヲ見

ル此高千穂山ヲ上ニ云ふ如く霧嶋山なる説ハ誤り也ば其西ヲ大隅國ヲ薩摩國人の云高屋山陵ハ大隅國肝属郡内浦郷北方村高屋山の巔ニ在り此山上を今俗ニ国見山ヲ云て国中を見ル也云ふ此説然るべし彼地霧嶋山より西方ニ在り高屋神社あり出見尊を祭れ尋ぬべし然る説日向ヲ云ふ如く上代ハ大隅薩摩ヲ云ふ日向國ヲ云ふ例ヲ挙バなり神武紀ニ日向國吾田邑ヲ可愛山陵の可愛もみな薩摩の地名ニ多以て知るべし然るに今日向國宮崎郡佐土原の辺り近き海書紀景行巻十二年ニ高屋宮ヲ云ふ高屋宮ヲ云ふ居於高屋宮ニ已六年也ヲ云ふハ大隅薩摩の域ヲ非ず日向国ヲ聞えしもこれハ此御陵の在る高屋ヲハ別ヲ云ふし。○書紀ヲハ迹々藝命葬不合命の御陵を

を記されて三御世の備まり此記も必然有ばきやと
おるゝ穂〻手見命より御歴年をも御陵をも記
して餘の二御世のそ共ゝ見えざるハ初より漏るゝ
おもしし故今ゝいでゝ此ゝ其二御陵をも挙て注し
ぶし書紀云久之天津彦〻火瓊〻杵尊崩因葬筑紫日
向可愛之山陵可愛此云埃諸陵式ゝ日向埃山陵天津彦〻
火瓊〻杵尊在日向國無陵戸ゝ所ゝ廟陵記ゝ今薩摩
國頴娃郡ゝ云ゝ然るぶし和名抄ゝ薩摩國頴娃江乃郡
頴娃郷ときなり娃字ハ紀伊の伊字ゝの例りて〇エ
ハ〇えいゝ云其も〇エを長く引て唱なり文字ハ舊のまゝ
まゝ頴娃ゝ書或ハ江居ゝも書ゝ和名抄ゝ江乃ゝあ

乃字ハ削るぶし御陵必此延ゝ所ゝるぶし薩摩國人の云可愛
山陵ハ薩摩國高城郡水引郷五墓村中山の巓ゝ所ゝ天書ゝ瓊〻杵尊云
云葬筑紫日向縁之中山之巓陵也ゝ見色なり又川合
陵端陵ゝ云て二ッあり今俗ゝ中山陵をバ中陵ゝ云て
中ゝ所ゝり瓊〻杵尊の陵ゝ云ゝ川合陵ゝ其在端陵ハ
右ゝ在て此二陵をバ天照大神ゝ忍穂耳尊の陵ゝ
ゝ云ゝ非なり古帝皇御葬ゝ或ハ三陵を皆以一ゝ聖
躰ゝをゝ老餘ゝ輻車及服御の物等をハ〻ゝ三墓を
合せて其帝皇山陵ゝ所ゝるぶし然をバ此三陵合せ〻
瓊〻杵尊の可愛山陵ゝ所ゝるぶし其中ゝ玉躰を藏奉ゝ乃ゝ
中陵ゝ所ゝるぶし今見ゝ所ゝ此中陵ゝハ巓ゝ安磐石二ッ尚如墳
壕周圍以井韓世命修之其石最大如俗謂片石非神功
不能輸山上他二陵則無之さて又此陵の右ゝ新田宮
ゝ云ゝり瓊〻杵尊を祀ゝ又天照大神拷幡千〻姫を
も配祀ゝ此宮ハ後世ゝ建ぶし乃ゝ此廟の山を
神亀山ゝも亀山ゝも云ゝ山の形ゝ依て乃ゝ記此廟域
ゝ即瓊〻杵尊ゝ宮城の墟なり廟山乃背を城村ゝ云
屏障を削成ゝ似ゝ官城の趾なりゝ是云傳乃
なり さて或人川合ゝ可愛の字音ゝ相近き以て彼

川合陵を可愛陵なりと云ハ非なり。今見るに中山陵と
端陵とハ大なる係阜にて山の如くなるを。川合陵ハ
中山陵を距ること一里許にて。其地卑湿狭隘。非可以
蔵玉躰之処と云り。宜長今此説を按ふに。古へ帝皇を葬る。或
ると云ことを云るハ。然もあることなきことなり。必三墓を合
きて。其山陵となせしことにも非ずバ。かの川合陵端陵
なりと云二ツを。可愛御陵なりとハいふこと別なる。他神乃御墓なりと云へ
おぼしく。其故ハ。川合陵ハ中山陵を距ること一里許なりと云へ
ればなり。若是可愛御陵に附ける由あらば。さばかり
遠く放れて在べきにはあらじ。端陵ハ中陵より幾ばかり
離れるにか。川合陵の遠きに准へて思へバ。其も甚
近くハ非るにや。凡て右乃説に。右に云る里
云係る。いと近く。一ツ城に相並べる如く聞ゆれを。かの
川合陵ハ一里許距れりと云へるバ。端陵も遠き近き程
知らざるなり。凡てかゝる事を。委く記さむに
は。東南西北の方位を云て。其方幾ばく放れりと云ざ
れバ。其在処知らざるなり。なほ左右とのみ云てハ甚
おぼつかなし。又高城郡ハ頴娃郡と接きて。此御陵の
地。古ハ頴娃郡なりしを。今ハ高城郡に属るにや。若
此二郡相接らば。離れる城なるにや。此中山陵も。

なほ疑はしきになむあれバ。此郡の在処をも。日向國人にハあ
まねく尋ねて決むべき物なり。
口決に可愛之山陵在日向國宮崎郡と云る
私説なり。心得ず。又或人云。臼杵郡縣西三里有大
陵。異氣甚盛。而不得近焉。是可愛陵歟。又或人云。臼杵郡
永井可愛村と云神社なり。傍百町餘山あり。絶頂に靈
石三尖ル。岩洞なり。是可愛陵ならむ。又或人云。今日向國
延岡の領内に。法なるハちか可愛と云所ありて。そこに陵
山と云なり。山の腹に神社あり。御陵をば何とも知らずとなり
なるべきもまだりにちかければ。又或人云。臼杵郡高千穂
山の東南の方に。榎の嶽と云山あり。其山中に。近く藝
命の陵なりと云なり。里人大石明神と申次なり。なれど
云り。何れも古く故ある地とハ聞え
なれど。可愛御陵にハ非じとぞ思ふ。又書紀ニ云。久之彦
波瀲武鸕鷀草葺不合尊崩於西州之宮。因葬日向吾平
山上陵。諸陵式に。日向吾平山上陵。彦波瀲武鸕鷀草葺
不合尊。在日向國。無陵戸と有り。廟陵記に。今大隅國始

羅郡之山を云ふ然るに和名抄に大隅國姶羅阿比良郡又大隅郡姶膳熊毛郡阿枚あり本より別處なり又一の阿比良なるべかく三郡に分属るの地理を尋ねて決し又今世に肝属郡に姶良又大姶良を云處あり御陵此等の内に在なし薩摩國人の云く吾平山陵を大隅國肝属郡姶良郷上名村の巖洞中にあり此巖洞東方に向ふ内の廣さ三十歩ばかり陵上に祠あり又小川を隔てゝ前に廟あり鵜戸權現を云て葺かい和ばれば神代乃三御陵を大隅を薩摩に在て日向國にはあらず然る此諸陵式に何を以て後に國分を云ふ日向國を考ふるに在て世に其郡名を記さるに此三御陵のみ郡を記さざるは書紀の文に依るの日向

國にのみ尋ぬるべし彼國に今其ぞ彼ぞ神代の御跡ぞとあるを心得がたし大隅薩摩に在しは人もそなく又かつて他國人の往ることなきも稀なる國なればおのづから埋もれて世に識人もなく已はやくなるに此事況慷慨思ふにうつて大隅薩摩に古を慕ふ人に逢て願ひ尋ねばなるに近ほど白尾齋藏國柱を云薩摩鹿児嶋の人の書に神代山陵考を云物を得て見るに果してみな彼二國に行ふ今此御陵ぞとの注の中に薩摩國人の云て云ふ諸陵式に已上神代三陵を山城國葛野郡田邑陵南原に祭之其兆域東西一町南北一町ぞなる此を筑紫は甚く遠き故に此地にして祭賜ぬるに加ひまバ古より此御陵ぞと定も無ふ故に其地を奉遣し賜ふ事なれば何處ぞ知ぬ終に歴代

の諸御陵ハ関ル種々事ヲ
ハ中巻畝火山御陵の処ハ云ヘし

是天津日高日子波限建鵜葺
草葺不合命。娶其姨玉依毘賣
命。生御子名五瀬命。次稲冰命。
次御毛沼命。次若御毛沼命。亦
名豐御毛沼命。亦名神倭伊波
禮毘古命。四柱故御毛沼命者。跳
波穂。渡坐于常世國。稲冰命者。
爲妣國而入坐海原也。

姨ハ御袁婆ナリ。新撰字鏡ハ姨母乎波ヲ見ヘ。和名抄ハ唐韻云。姨母之姉妹也。爾雅云。母之姉妹曰従母方

乃手波と云り。祖父祖母ハ。大父大母の意にて。於遅於婆と云。父母乃兄弟ハ。小父小母の意にて。表遅表婆と云。於と表と。大小の差なり。さて父の母。又兄弟をバ。すべて於遅於婆。表遅表婆と云。母方のをバ。母方之某と云ハ。これも分て云べきなれども。ことになり行き。常にハ。母方のなども。すべて於遅於婆表遅表婆とのみ云ことなり。今ノ世とても然なるを。さて或説に。以レ姨為レ妻非レ礼と云て。論あるを心得ず。古の正しき書に。是を非レ礼と云ること見えず。何を據り云るぞや。若漢國のさまを以て云りや。それハいみしきひがことなり。外國乃さまに拘泥て。いかでか皇朝明神の御所為を議奉るべき。あなかしこ。○五瀬命。此御名を。伊世と訓ハ。いみしき非なり。五十をこそ伊と云へ。たゞ五を。伊都と云例ありて。五百の外にも。伊とのみ云る例なし。御名義ハ嚴稲なり。稲を志祢と云る例多く。和名抄に。糈ハ久万之祢。粳米ハ宇流之祢。稲乃古利之祢など乃類なり。其志祢を切えて。世と云ハ。早稲なども然なるべし。嚴を五と書る例。垂仁紀に。嚴檮之本。とあり。万葉一に。

五可新何本と書る。嚴と五とハ。都の清濁差あるが如くなれども。五手船をも。万葉廿に二処まで。伊豆手船と書る。これらを誤思ならバ。五しも。古ハ都を濁りしにやとおゆ。然れども。此をいづれとも思定めがたけれバ。此ノ御名の五も。姑ク都の清音に讀ム。此ノ命乃御事ハ。白檮原ノ宮ノ段に出たり。續紀二に。三田ノ首五瀬と云人ノ名も見ゆ。○稲氷命。御名ノ意書紀に。稲飯と作きハ字に意なき。○御毛沼命。御名ノ義御食主なり。出雲ノ國造ノ神賀詞に。熊野大神櫛御氣野命とあるも。此を須佐之男ノ命を申に同意乃称名なり。又國ノ名の上毛野下毛野も同意なるべし。こハ然る由ありてぞ名けゝらし。○若御毛沼命。如此四柱の御名並。稲御食などを以て称奉れるゆゑハ。上處々に云る如く。殊に天津日嗣に重れる由緒あるが故なり。○神倭

伊波礼毘古命此大御名ハ大和の京に遷坐て天下所知看て以上ゐ称奉れる物なり書紀一書ゐ狭野尊亦号神日本磐余彦尊所称狭野者是年少時之号也後撥平天下奄有八洲故復加号曰神日本磐余彦尊ゑの名ゐ如し狭野ハ早稲主ゑ意ゐ考へ出ゑ早稲を和佐云例ゑ早田早稲田早稲穂の意なり和佐ゑ云ハ下ゐ類なり〻〻も早稲田ゑ以て知ゑし和世を和佐ゑ云ハ下ゐ稲ゑ限ゑ多ゑ言ゑ連称云ゑきゑ例ゑて稲ゑ也伊那某ゑ云ゑ如し〻て神ゑ申し倭ゑ申ゑ論なき波伊波礼ゑ称申せゑ何の由ゐ詳ゐ〻ゑ大和国十市郡ゐ此地名ハゐゑ〻も大御名ゑ称ら〻ゑ申ゑ由縁ハゐ〻ゑ也但し書紀此御巻ゐ夫磐余之地舊名ゐ居亦曰厳稲敷立速我皇師之破虜也大軍集而滿於其地因改号為磐余ゑ〻ゑ依て考

ゑ〻ゑ皇軍倭國ゐ到て此時ゐ大〻ゑ振〻ゑ形〻て集滿〻ゑ多賀て倭伊波礼毘古ゑハ称奉れるにゑゑ〻ゑ也若然らバ彼地名を取ゑ〻ゑ〻ゑハ〻ゑ〻ゑで〻ゑバ皇軍ゑ倭〻ゑ〻集滿ゑ由の御名ゐ〻ゑ又其地の名ゐも負せし形ゑ〻ゑし〻ゑ或曰天皇往嘗厳瓮粮出軍而征是時磯城ハヤ十梟帥於彼處屯聚居之果与天皇大戦遂為皇師所滅故名之曰磐余邑ゑ〻ゑ〻ゑ依らバ〻ゑ〻ゑゐ中ゐ強き敵ゐ勝ゑ〻ゑひし地名を以て其地名を以て称奉れるかも〻ゑ〻ゑ書紀云彦波瀲武鸕鷀艸葺不合尊思ゑ決ゑ〻ゑ以其姨玉依姫為妃生彦五瀬命次神日本磐余彦尊凡生四男一書ゐ先生彦五瀬命次稲飯命次三毛入野命次神日本磐余彦尊云〻一書ゐ先生五瀬命次三毛野命次稲飯命次狭野命云〻一書ゐ先生五瀬命次稲飯命次磐余彦尊亦号神日本磐余彦火〻出見尊一書ゐ先生彦五瀬命次稲飯命次神

日本磐余彦火々出見尊次稚三毛野命一書に先生彦五瀬命次磐余彦火々出見尊次彦稲飯命次三毛入野命なるべし○波穂上の出の三葉○跳ハ布美豆と訓ぶし師も加祁理豆と訓ぶ此字史記漢高祖本紀の項羽遂圍成皐漢王跳獨与滕公共車出注に跳走也と云又輕身走出也と云此勢にて渡坐やうきばを以て此字を書るべし下に走行意ハおのずから具此字ハ布美豆と訓ても走行意ハおのずから具まり又波穂を波みくさいと書紀にハ蹈浪秀と云へり○常世國ハ何國かまれ皇國を離れて易く往還かたく絶遠き國を云なり上傳十二の葉に委云るが如し此てかく御毛沼命ハ然れ國に渡り坐ふ所以も詳なるべし下の論ひも同じ姓氏録右京皇

別に新良貴彦波瀲武鸕鷀草葺不合尊男稲飯命之後也是於新良國即為國主稲飯命出於新羅國王者祖印本に本に依まりかの出字も坐を誤まるにかの弟うさかハ是字の下に出字有て即為國三字脱まり今ハ一て命下に出於二字も衍なるべし者字ハ之の誤なるべしさて又此姓も葺不合尊の御子に後なれバ神別天孫部に収るべきに神武天皇の御兄弟なれば以て皇別にハ収まれるべし

也バ新羅國に渡坐て其國王に為坐せるなるべし新羅を常世國なりとかゝるべみ北史新羅傳に其王ハ本百濟人自海逃入新羅遂王其國なりと云るハ実も皇國人に て此命の御事なる多誤りて百濟人なりとハ傳ふるにかや其も御毛沼命なるを姓氏録に稲飯命なりと御兄弟に間乃傳の異なる例多かり○為妣國ハ御母に國なるにより

云むゞ如し。玉依毘賣命ハ。海神の御女ゝ坐バなり。須佐之男命も。欲往妣國ゝ申賜ふ。上ゝ見返ゝ。

○入坐海原也。海底ゝ沈入坐ゝ云なり。漢籍ゝ船ゝ乘て海上ゝ。其趣くを。入海ゝ云ハ。異なり。又海原ゝ云バ。海上ゝの如く聞ゆ。ゝ底ゝ。然云ふ。

ゝ。例上ゝ天神之御子。不可生海原ゝあるゝ。海神宮なる。思ぬ。書紀神武御卷云。戊午年五月。進到于紀伊國云〻。六月到熊野神邑。且登天磐盾。仍引軍漸進海中。卒遇暴風。皇舟漂蕩時。稻飯命乃歎曰。嗟乎吾祖則天神母。則海神。如何厄我於陸。復厄我於海乎。言訖乃拔劍入海。化為鋤持神。三毛入野命亦恨之曰。我母及姨。並是海神何為起波瀾。以灌溺乎。則蹈浪秀而往乎常世鄉矣。

此。二柱。命の御事。此。記ゝ書紀ゝ。相照して。委曲ゝ考ふ。先。御毛沼命乃常世國ゝ渡坐。事。此。記ゝ何の所ゝ云ゝ見返ゝ。ゝ。ゝ。

止船得着岸ヲ可ル ヤ いかよ 似 以て思ふ ふ
此命海ふ入坐て伊波礼毘古命乃御身ふ代て救ひ
奉ら ヤ ん 御心なり ら む ん を此記ふ為ニ妣國ヤ云
ふ母命海神の御女ハ已其宮ふ罷入て海神ふ
逢てよきさまふ請て浪風を止ム 見 む ヤ 所念ス御心
うて母命乃國ふ賴みぢよ 所思 ふ 意可き
バ ツ ぢし抑伊波礼毘古命ハ御弟ふ坐 せ ば と既く御
世嗣て君ふ坐ける故ニ稲氷命ハ御兄なが ら 如此あ
ら に や ら と く こ ら ふ み御毛沼命ハ御弟なるふ先
ふしはうりむ ヤ ら ら

ふ申し稲氷命ハ御兄ふ ふ後ふ申せ ん ら其事ふ時
の前後ツイデ ら ふ れ る ふ ヤ ら ら 年

古事記上卷終

終字無き本ヲ ヲ と又卷字も共ふ無き本もあり

国立公文書館
National Archives of Japan